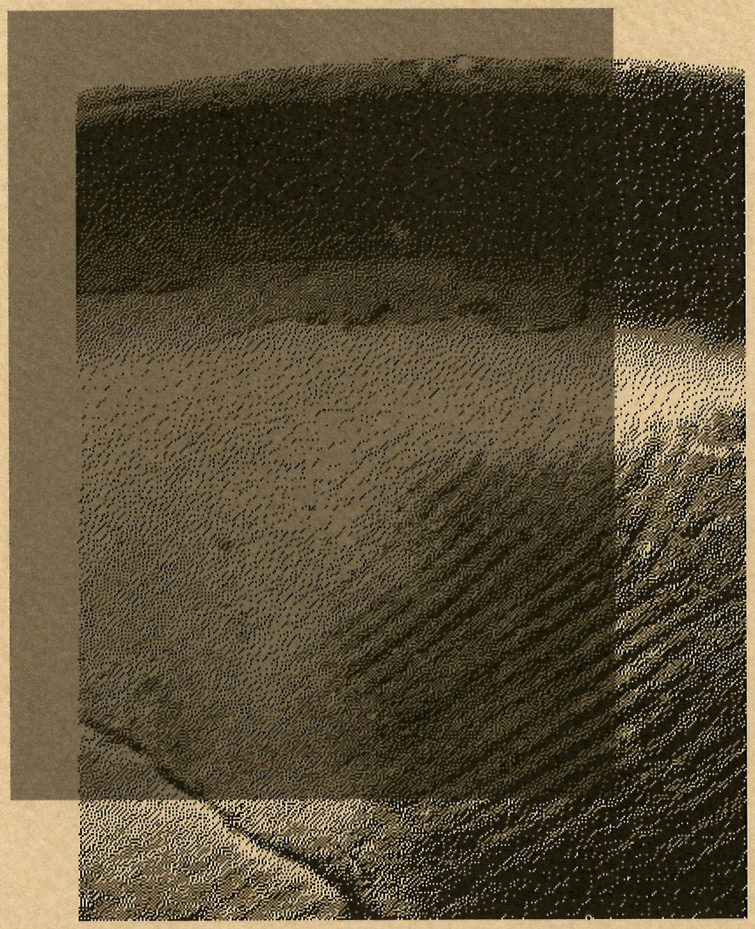
楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告書



2001　　財団法人東大阪市文化財協会

例言

共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第1次発掘調査は，山川喜久三氏の委託を受け，当協会が五井若葉を担当者として実施した．発掘調査経費は山川氏のご負担によるもので，同氏の多大なるご協力に感謝致します．現地では，生和建設株式会社、株式会社島田組の関係者に助力を得た。
現場調査補助員として石賀信宏、谷山祐一郎、中川義夫、鳴川秀生が、整理補助員として、田中明美、夏原宜佐子が参加した。報文は五井が作成した．
共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第２次発掘調査事業は，株式会社 大東建託の委託を受け，当協会が松田順一郎を担当としておこなった．発掘調査経費は，大東建託のご負担によるものであり，同社の多大なご協力に感謝致します．また，当初予定されていなかった地表下1.2m以下の掘削は，委託者のご厚意と，掘削作業員諸氏のご協力による．本調査結果と箕後川下流域の池島遺跡の調査成果との関連について，財団法人 大阪府文化財センターの井上智博氏にご意見をたまわった．現地の発掘調査と調査成果の整理には，藪野勝久，宮島仟，大川寿一，辻康男が補助員として従事した．報文は松田が作成した．
国土座標基準杭設置は写測エンジニアリング株式会社に委託しておこなった．

目次

第１章　楽音寺遺跡第１次発掘調査報告　1
1.1 はじめに　1
1.2 調査結果　2
堆積層1・2・(2) ― 近代から現代 ―
堆積層３・４ ― 古墳時代以降 ―　2
堆積層５・5' ― 弥生時代後期から古墳時代前期 ―　5
堆積層６・6' ― 弥生時代中期から後期 ―　6
堆積層７ ― 弥生時代中期 ―　6
1.3 まとめ　6
1.4 第Ⅴ様式甕の製作技法の復原　14
1.4.1 土器製作工程と底部裏面の痕跡との関連性　16
1.4.2 タタキ技法とタタキメについて　17
1.4.3 まとめと展望　18
第２章　楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積･土壌層序
― 共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第２次発掘調査報告　19
2.1 はじめに　19
2.2 楽音寺遺跡　19
2.3 調査地の位置と掘削の概要　20
2.4 堆積層序と堆積物の特徴　20
2.5 遺構・遺物帯（EZs）　27
EZ1（中世以後）　27
EZ2（古代～中世）　27
EZ3（古墳時代後期～古代前半）　28
EZ4（古墳時代前期）　30
EZ5（弥生時代後期）　30
埋没流路充填堆積物の相対年代　31
2.6 不撹乱試料の観察　31
試料の処理と観察方法　32
観察結果　32
観察結果のまとめ　39
2.7 楽音寺遺跡周辺の地形　42
2.8 楽音寺遺跡北部の堆積層の累重と地形発達　42
2.9 まとめ　45

第１章　楽音寺遺跡第１次発掘調査報告

1.1　はじめに

楽音寺遺跡は東大阪市東南部横小路町と八尾市北東部楽音寺に市境を越えて拡がり、楽音寺遺跡の名は後者に由来する。遺跡は東方の生駒山地西側斜面と西方の沖積低地の間に発達した扇状地上にある。周辺には扇状地上に立地する馬場川遺跡、西の口遺跡、西方の沖積低地に立地する池島遺跡などがある。

1994（平成6）年7月、横小路5丁目1049-3、1060-1、1061-1地内（図1.1）において共同住宅の建設が山川喜久三氏により計画されたが、楽音寺遺跡内の埋蔵文化財が破壊されるおそれがあったため、事前に東大阪市教育委員会によって試掘調査がおこなわれた。その結果、地表下1m付近で弥生時代後期の遺物が出土し、その遺物を含む堆積層の存在が確認された。この試掘結果に基づき、地権者、工事関係者と教育委員会との協議を経て、共同住宅建設によって埋蔵文化財が破壊されるところを財団法人東大阪市文化財協会が委託を受けて発掘調査をおこなった。

調査地は旧国道170号線の西約100m、横小路町から池島町を西に流れる箕後川の北約130mに位置する。現地の調査は、共同住宅の建設にともなう基礎杭の打設や掘削によって遺跡が破壊される4箇所にトレンチを設定し、便宜上調査区をＡ～Ｄ地区と称した（図1.3）。掘削した残土を調査地内に仮置きするため、Ａ～Ｃ地区の調査を先行しておこない、埋め戻した後に、Ｄ地区の調査をおこなった。調査面積はＡ地区（99m²）、Ｂ地区（30m²）、Ｃ地区（99m²）、Ｄ地区（68m²）の合計296m²である。現地表面の標高は約12.5mである。

発掘調査は試掘調査で確認された弥生時代後期の遺物を含む堆積層の上面、現地表面より1.1mまでを機械で掘削した。以下、現地表面より2.2mまでを遺構・遺物を確認しながら人力で掘削した。

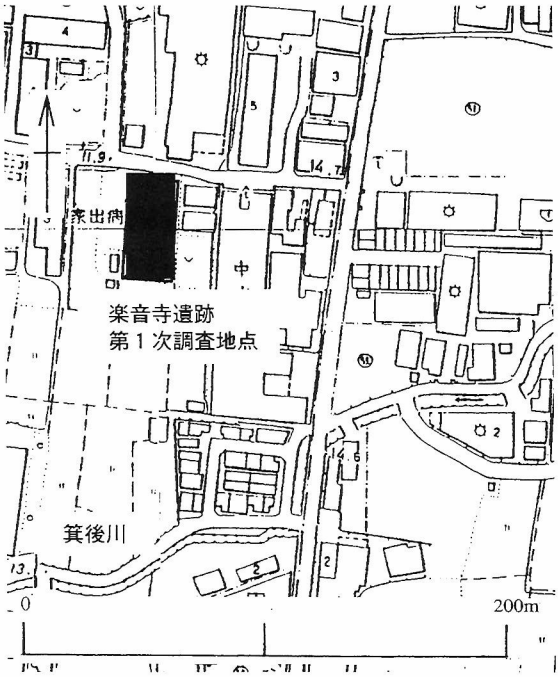


図1.1　楽音寺遺跡第１次調査地

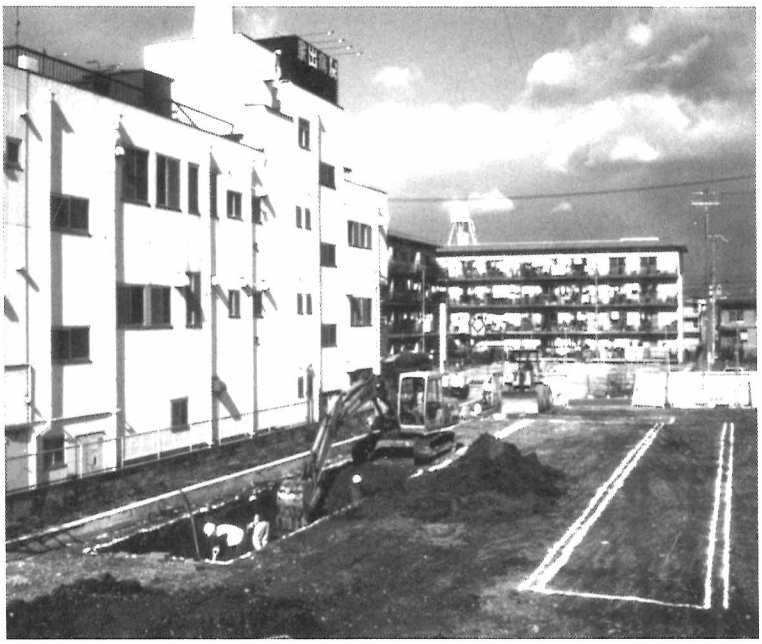


図1.2　機械掘削風景

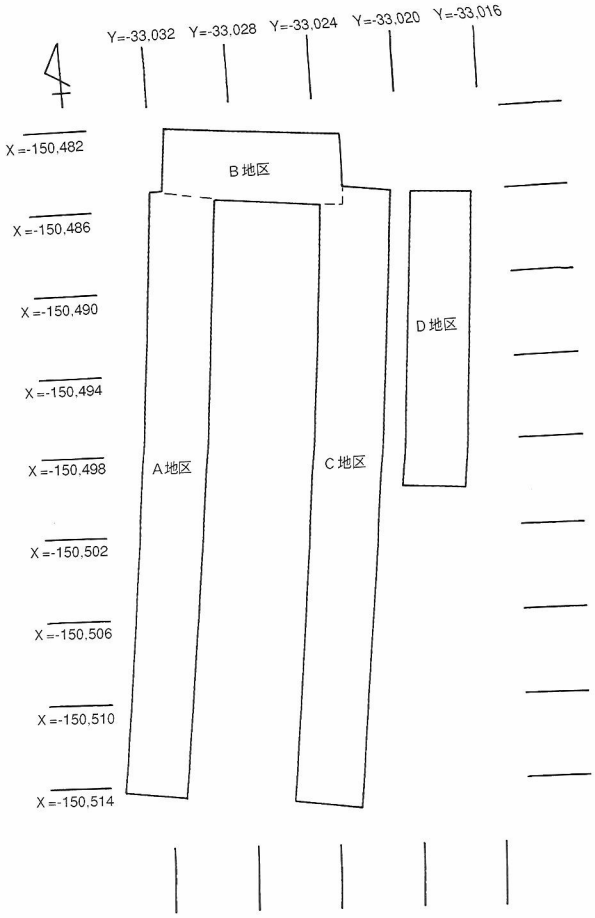


図1.3　調査区位置図

1.2　調査結果

調査で確認した堆積層の累重を1から7までに分層した。それらは各堆積層から出土した遺物によって、5つの時期に比定されるものと考えられる。しかし、堆積層1から4までは機械で掘削したため出土遺物を採集できなかったため、それらについては推測される時期を示した。出土遺物については図1.15～1.33に掲載した。

堆積層1・2・(2)　ー近代から現代ー

現地表面の直下は礫からなる現代の盛土層がみとめられた。その下方の堆積層2は耕作土でかたくしまった砂質土である。B地区以外の調査地でみとめられ、場所によって2枚から3枚に細分できる。

堆積層3・4ー古墳時代以降ー

堆積層3・4は調査地全域において50cm～1m堆積していた。堆積層3は中粒砂～礫、堆積層4は細粒砂～中粒砂で、上方粗粒化しており東から西へむけて厚く堆積していた。B地区では断面の観察によって溝状のおちこみを確認でき、人為的な利用があったことが推測される。これに伴いB地区の堆積層3はかなり擾乱された状況が窺える。堆積層4からは古墳時代前期（布留式）の土器

図1.4　A地区東壁断面

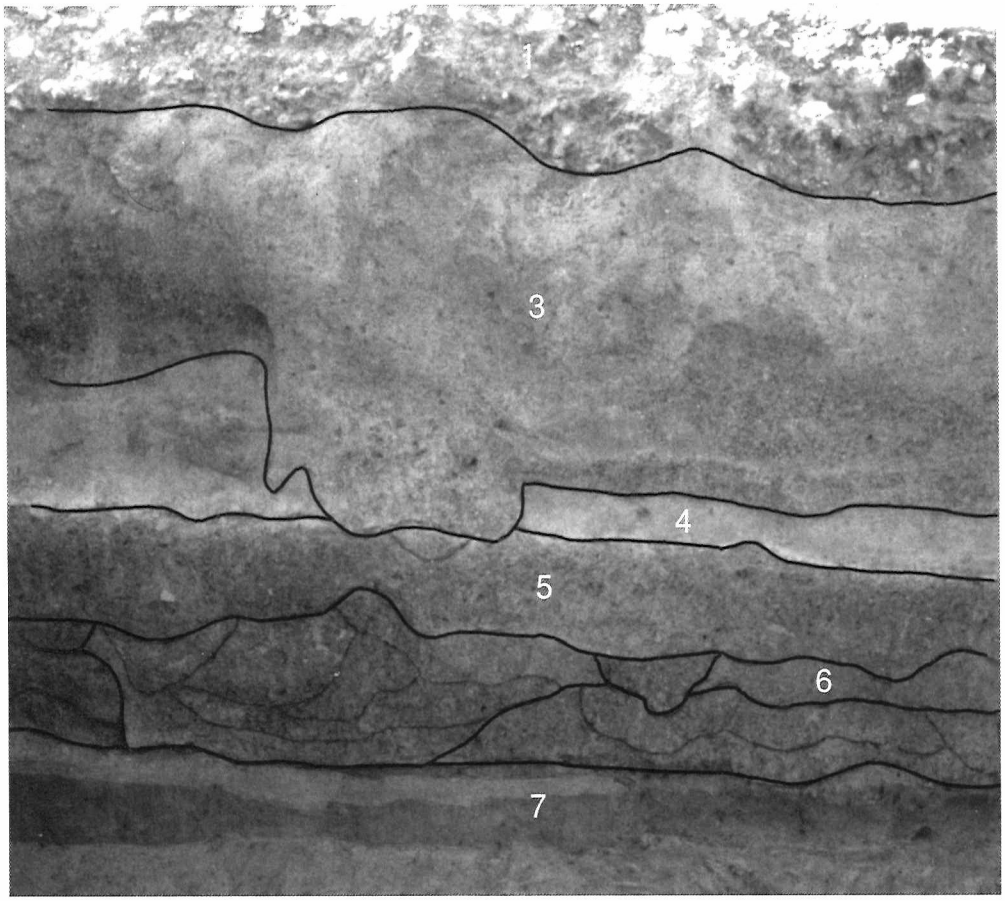


図 1.5　B 地区南壁断面

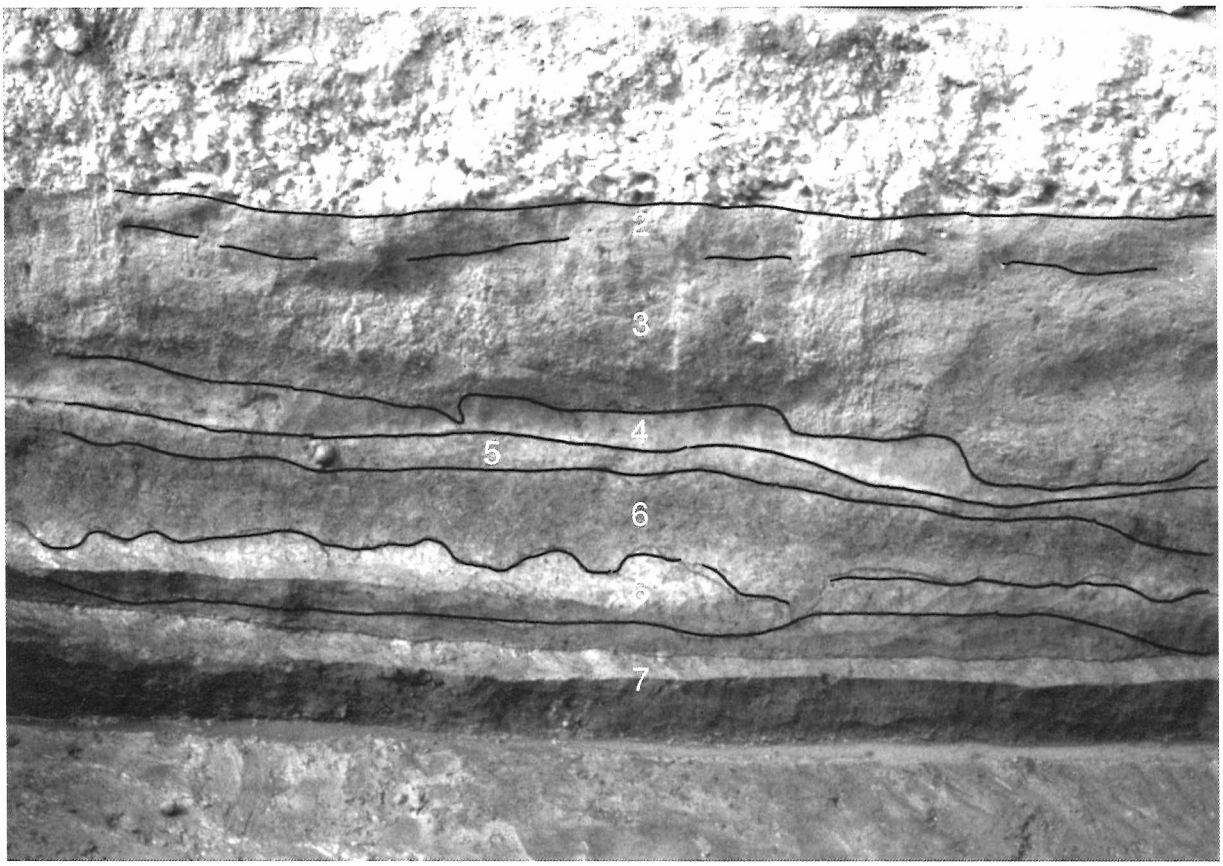
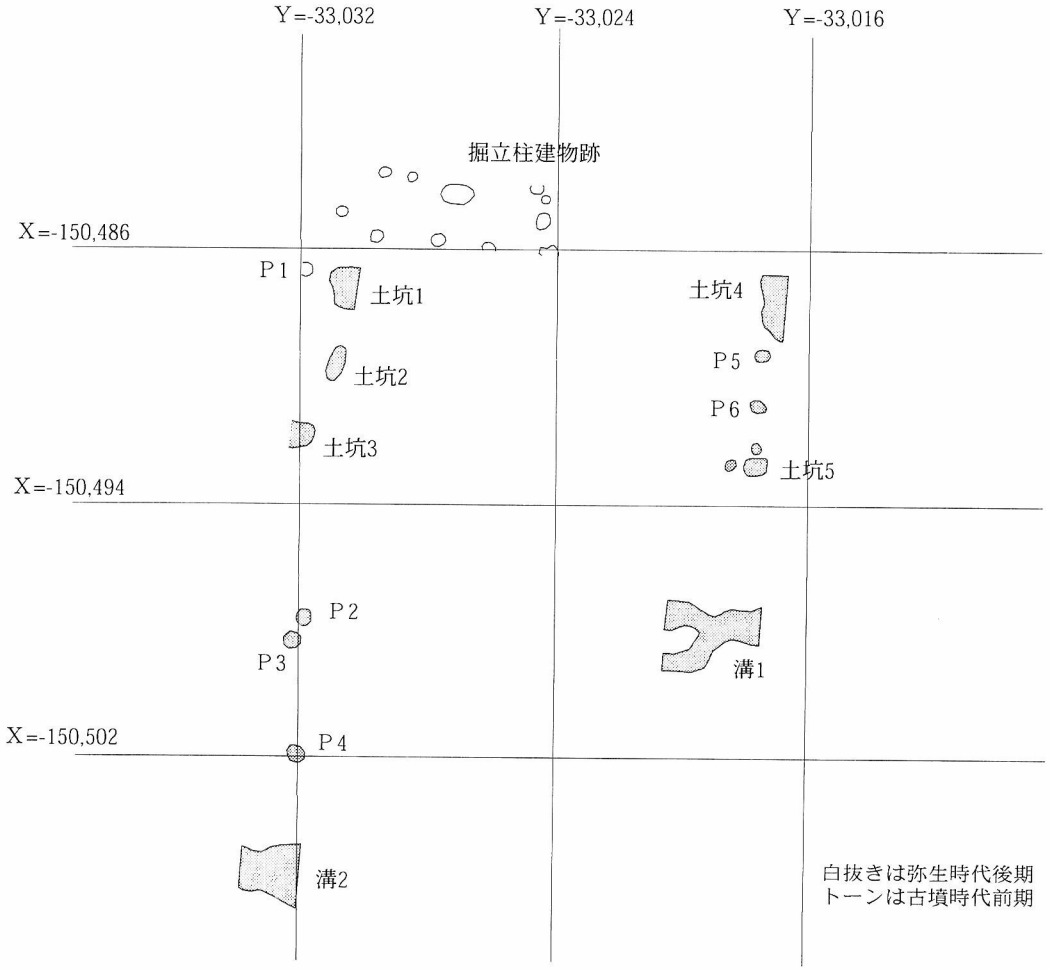
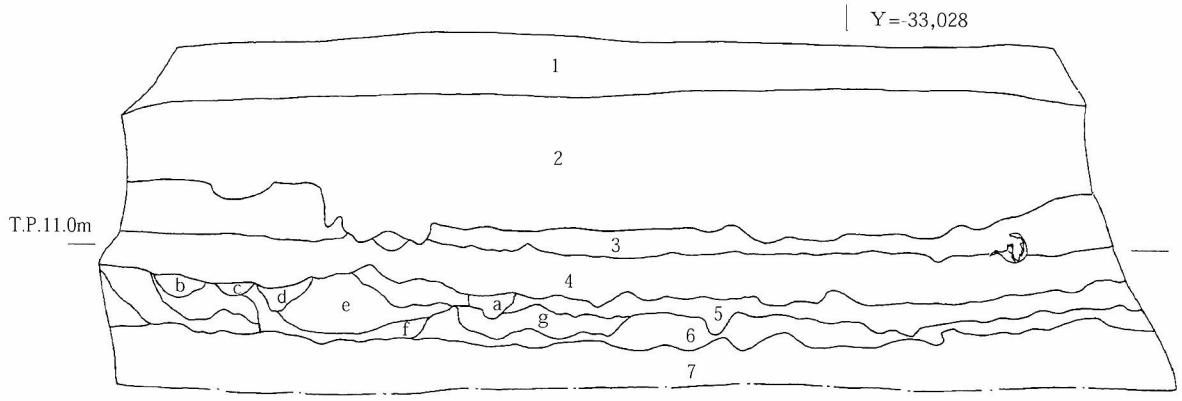


図 1.6　C 地区西壁断面





1. 盛土
2. 5YR5/8 細粒砂～粗粒砂
3. 10YR4/4 細粒砂～粗粒砂
4. 5YR4/8 シルト～細粒砂
5. 5GY3/1 粘土
6. 5YR4/6 シルト・粘土
7. N3/ 粘土

a. N3/粘土
b. N3/シルト
c. 10YR4/4シルト
d. 7.5YR4/4シルト～細粒砂
e. 5YR4/4～4/6シルト～中粒砂
f. 10YR3/2シルト～細粒砂
g. N2/シルト・粘土

図 1.7　弥生時代後期～古墳時代前期の
遺構平面図・B 地区南壁断面図

が出土しており、堆積層３・４はその時期以降に堆積したものと考えられる。

堆積層５・5' ―弥生時代後期から古墳時代前期―

上層の堆積層５は粗粒砂が混じる黒味をおびた粘質土で、根の痕跡が顕著にみられるなど土壌化がすすんだ状態であったと思われる。下層の堆積層5'では鉄の斑紋がみられ、Ｃ地区では鉄分が沈着した薄層が認められた。Ｃ地区南端では堆積層５の層厚は10cm程度にすぎず、土壌の発達は顕著ではない。しかし調査地全域、特にＡ地区ではこの時期は最も土壌が発達し、安定した地表面だったと考えられる。堆積層５・5'からは弥生時代後期の土器も出土しているが、古墳時代前期（布留式）の土器が多く出土した。堆積層５および5'の

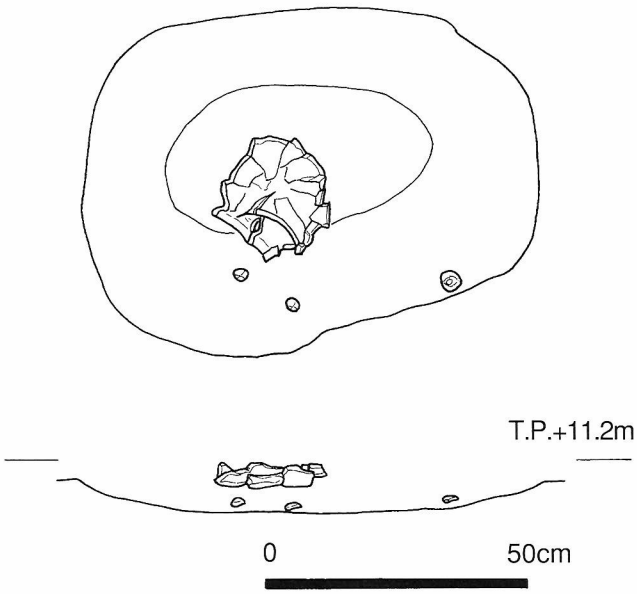


図1.8　土坑５出土状況図

図1.9　土坑１内土器出土状況

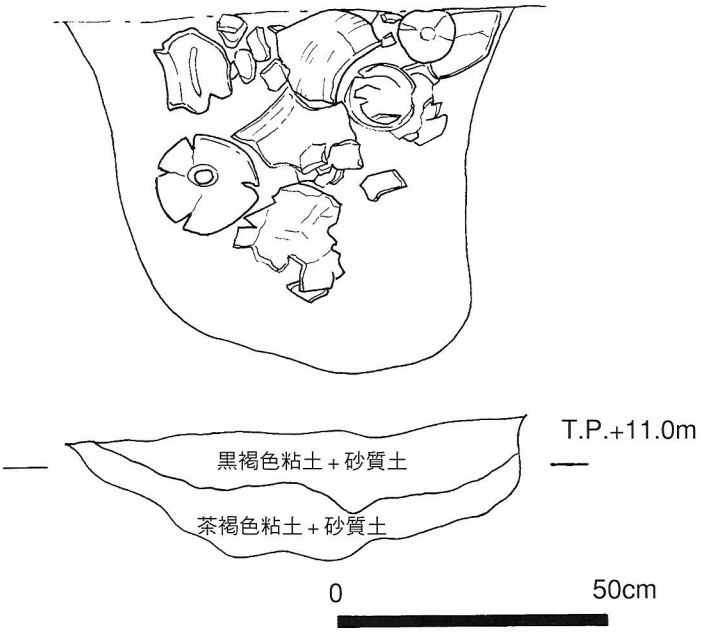


図1.10　土坑１出土状況図

上面では土坑や掘立柱建物跡と考えられる柱穴列などの遺構を検出した。柱穴は直径30cmの円形を呈し深さはいずれも20cm程度である。柱間は1.3～1.5mで、建物の軸は座標北に対して5度東偏している。この他にもピットは検出したが、建物の復原はできない。

堆積層6・6'ー弥生時代中期から後期ー

上層の堆積層6はやや黒味をおびた中粒砂がまじる粘質土で、下層の堆積層6'では鉄の斑紋がみられる青灰色の砂質泥層であった。A地区南端やC地区では上層部がそれほど黒味をおびず青灰色を呈し下層部と漸移的である。土壌の発達した状況はA地区中央から北部でうかがえ、その他の場所では湿地の状態から十分離水していなかったと考えられる。B地区では、堆積層7の泥層が西方に向かって低くなり、B地区およびA地区北端では、その低いところに粘質土（堆積層5'・6）が堆積していた。B地区で、青茶色の粘質土（堆積層6）が若干堆積した時期に掘削された溝状遺構が検出され、溝内から弥生時代中期（畿内第II様式）の土器類が出土した。溝状遺構の底には鉄分が沈着していた。常時水が流れていたものではなかったようであるが、何らかの排水を意図したものかと思われる。溝状遺構の上部は、砂質シルト質粘土が充填されていた。堆積層6・6'からは弥生時代中期から後期の土器が出土しているが、中期の土器はほとんど畿内第II様式で、畿内第III～IV様式の土器はわずかに出土した。

堆積層7ー弥生時代中期ー

調査地全域に、青灰色～オリーブ黒色の泥層が20～30cm堆積していた。この泥層はB地区の東端から西に向って低く分布していた。この時期の調査地周辺が湿地であったことが推測される。

堆積層7からは弥生時代中期（畿内第II様式）の土器が出土しており、弥生時代中期を通じて堆積したものと考えられる。土器の他にサヌカイトの石核および剥片、石包丁、磨製石斧などが出土した。

1.3　まとめ

弥生時代中期（畿内第II様式）から古墳時代前期にかけて、堆積層が泥層から上方粗粒化していく状況から、弥生時代中期（畿内第II様式）には湿地であった当地が、弥生時代後期頃から離水し、古墳時代前期までに次第に土壌化していく過程が確認できた。また、土壌が発達していく古墳時代前期までと、砂礫が堆積したそれ以降の時期とは異なる堆積条件が考えられる。

弥生時代中期（畿内第II様式）に、調査地周辺において集落が開始された可能性が高い。また、畿内第III・IV様式の土器の出土が極端に少ないことはその期間当地が放置されていたことを示し、土壌の発達にかかわるものと考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の当地は集落を営むのに適していたと推測される。

図1.11　調査風景

図1.12　遺構検出状況
左にみえる柱穴は1間×3間以上の建物跡に復原できる.

図1.13　おちこみ1検出状況

図1.14　おちこみ1内遺物出土状況

出土遺物

図1.15～1.30までに出土遺物を一括して掲載した.土器類については、器種、土器面の特徴（外面/内面）、色調、その他を、石器類については器種、石材、特徴を示した.

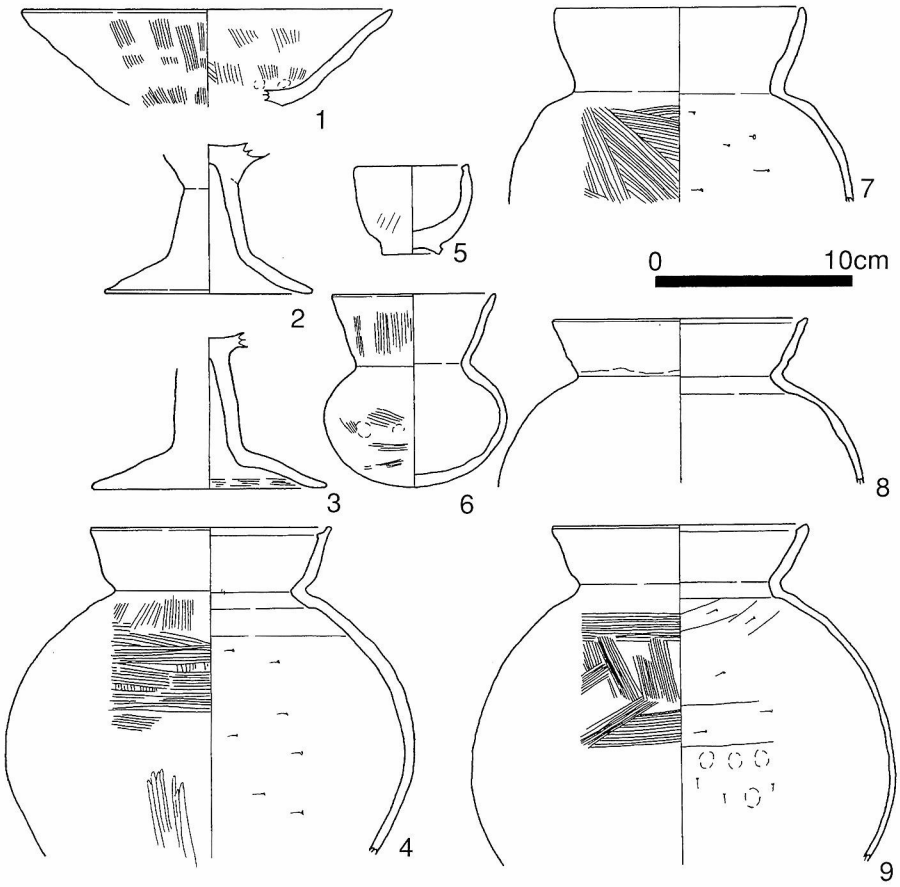
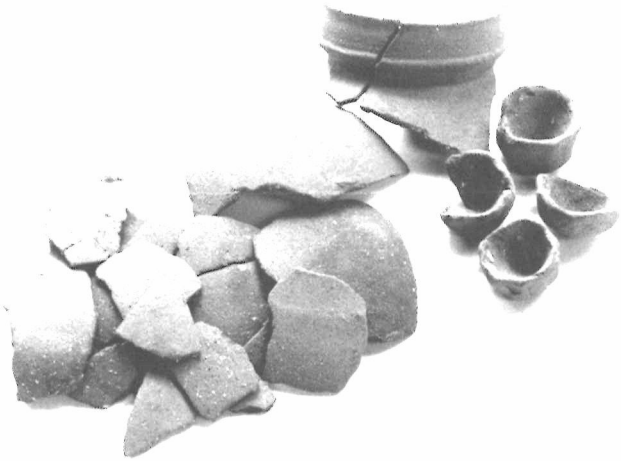


図1.15　古墳時代前期の土器（A地区土坑内出土）

1.高坏,ハケメ＋ナデ/ハケメ＋ナデ,褐色.2.高坏脚部,ナデ/ナデ,褐色.3.高坏脚部,ナデ/ハケメ＋ナデ,褐色.4.甕,ハケメ＋ナデ/ナデ＋ケズリ,褐色,焼成前につけられた刻みの痕跡がある.5.ミニチュア土器,ナデ＋煤付着/ユビオサエ,茶褐色.6.壷,ハケメ＋ナデ＋煤付着/ナデ＋ケズリ,灰白色.7.甕,ハケメ＋ナデ＋煤付着/ナデ＋ケズリ,灰白色.8.甕,ハケメ＋ナデ/ナデ＋ケズリ,灰白色.



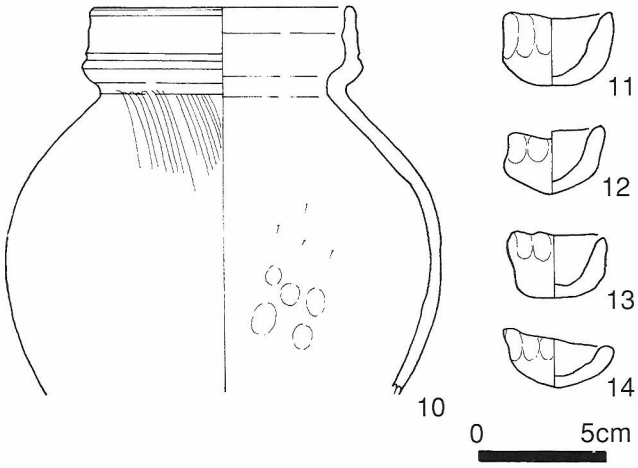


図 1.16　古墳時代前期の土器（D 地区土坑内出土）
10. 壷 , ナデ / ナデ + ケズリ , 茶褐色 .
11 ～ 14. ミニチュア土器

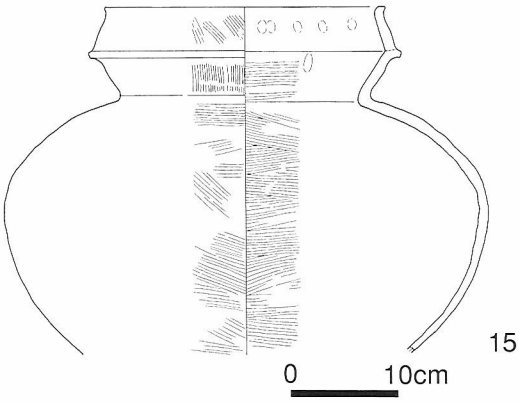


図 1.17　古墳時代前期の土器（A 地区堆積層 5 出土）
15. 壷 , ハケメ / ハケメ + ユビオサエ + ケズリ , 灰黄褐色 , 四国地方からの搬入品と思われる .

図 1.18　古墳時代前期の土器（堆積層 5・5' 出土）
精製土器の出土は少ない.高坏、ミニチュア類が多く出土した.右上の土器は二重口縁をもつもので他地域から持ち込まれたものと思われる .

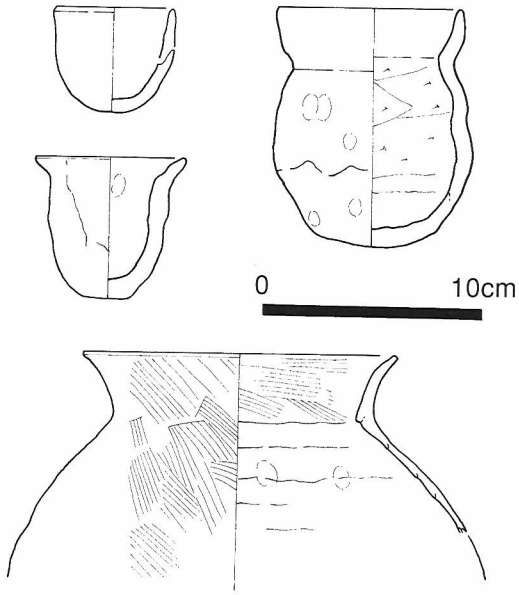


図 1.19　古墳時代前期の土器（堆積層 5・5' 出土）
16・17. ミニチュア土器
18. ユビオサエ＋粘土の継ぎ目＋煤付着，ケズリ，黒褐色．
19. 甕，ハケメ/ハケメ＋ユビオサエ＋粘土の継ぎ目，茶褐色．

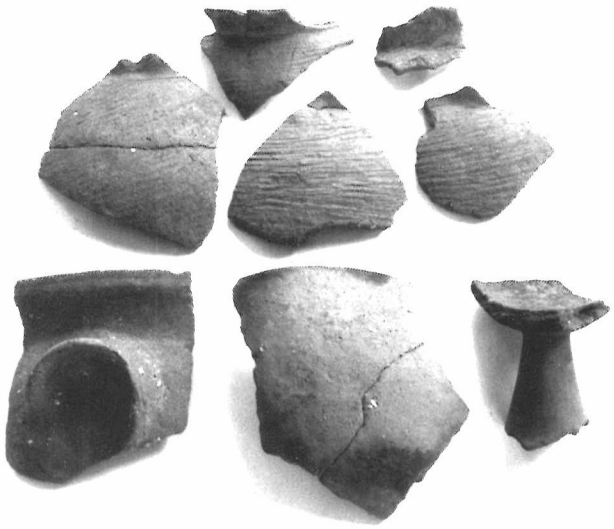
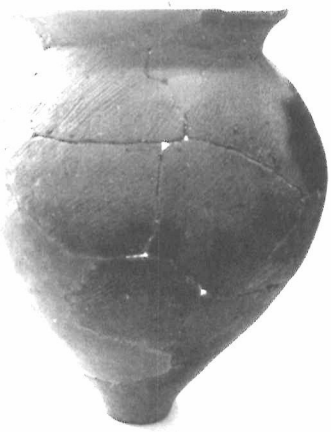


図 1.20　弥生時代中期から後期の土器（堆積層 6・6' 出土）



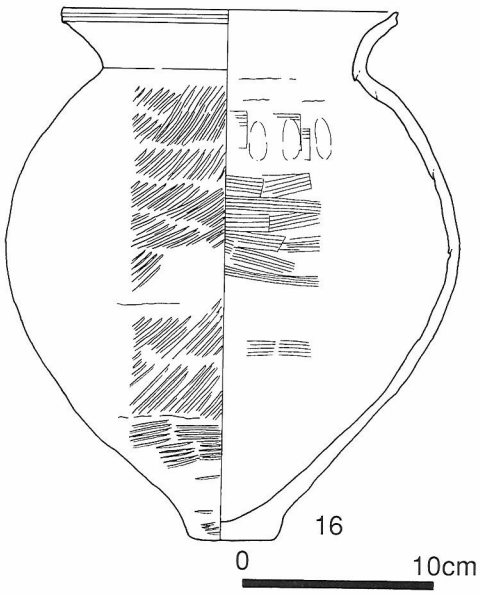


図1.21　弥生時代後期の土器（C 地区堆積層 ** 出土）
16. 甕，タタキメ/ハケメ＋ユビオサエ，茶褐色，最大径より低い位置で粘土の継ぎ目が顕著にみられる．

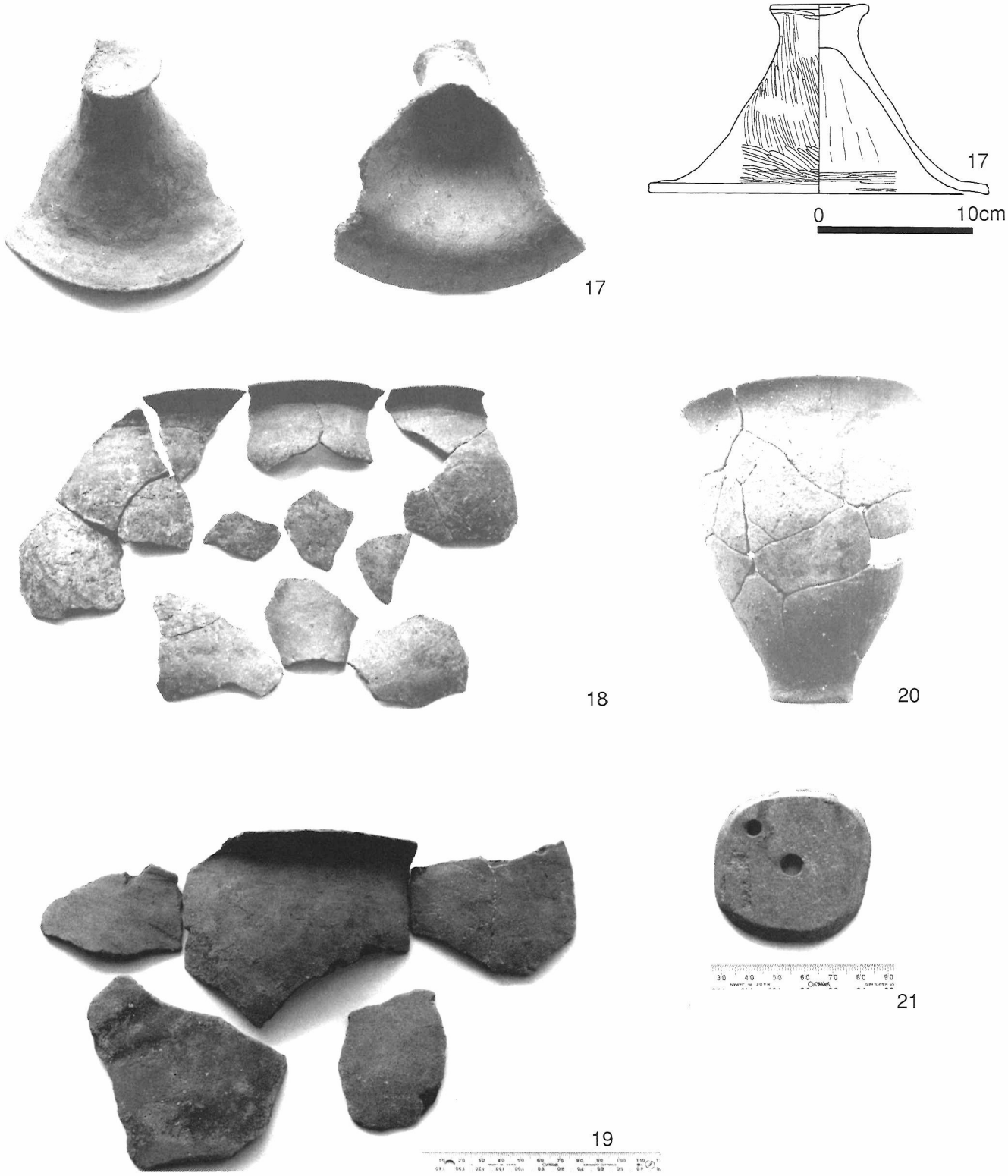


図 1.22　弥生時代中期の遺物（B 地区溝状遺構内出土）
17. 甕蓋 , ヘラミガキ / ナデ + ケズリ + 煤付着 , 茶褐色 .
18. 甕 , ナデ + ケズリ + 頸部に段を有する + 煤付着 / ナデ + ケズリ , 茶褐色 , 紀伊地方の技法の特色が窺える .
19. 甕 , ヘラミガキ / ナデ + ケズリ / ナデ + ユビオサエ , 黄茶褐色 .
20. 甕 , ハケメ ? / ? , 赤褐色 , 口径 17.6cm.
21. 磨製石器 , 緑色片岩 , 石包丁を加工し一周にわたり刃部をもつ . さらにその後中央に穿孔し紡錘車として利用したものと思われる .

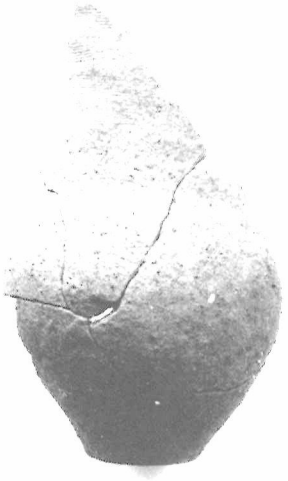


図 1.23　弥生時代中期の土器（B 地区堆積層 7 出土）
壷 , ナデ + 櫛描文 / ナデ + ケズリ,茶褐色,角閃石を多量に含む . 当遺跡では角閃石を多量に含む土器の出土が非常に少ない .

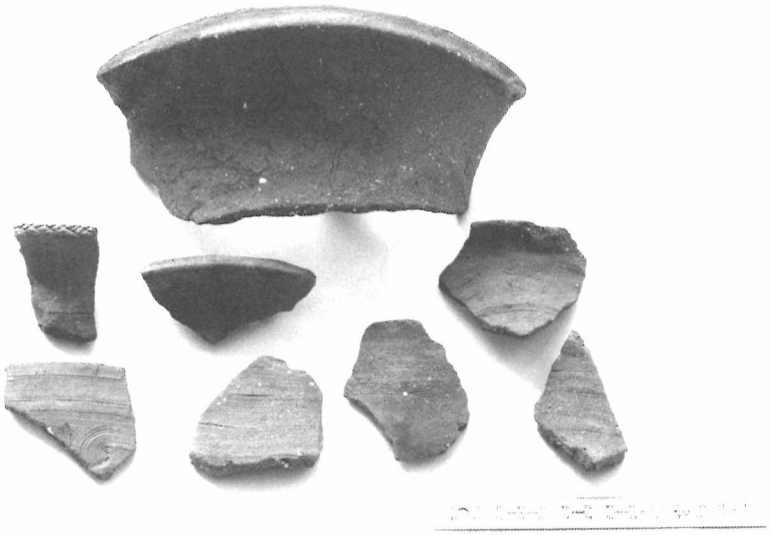


図 1.24　弥生時代中期から後期の土器（壷・鉢）

図 1.25　弥生時代中期の土器（甕）

図 1.26　弥生土器底部

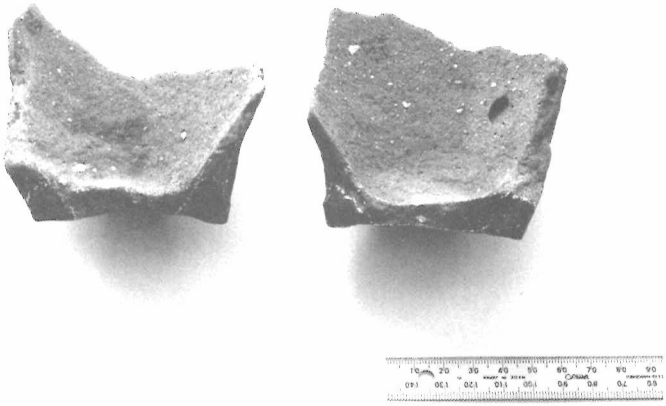


図 1.27　弥生土器底部

図1.29　磨製石器,石包丁 , 緑泥片岩

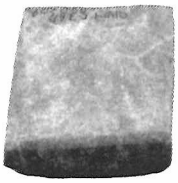


図1.30　磨製石器,偏平片刃石斧 , 粘板岩

図 1.28　弥生土器底部

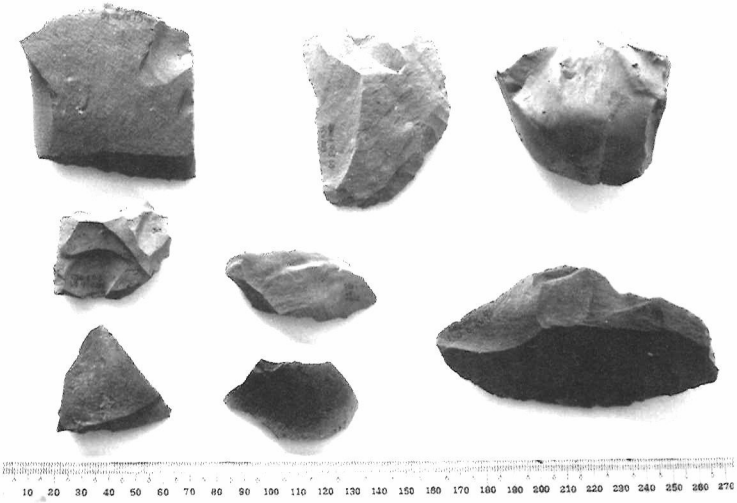


図 1.31　石核 , サヌカイト ,/ 剥片石器 , サヌカイト

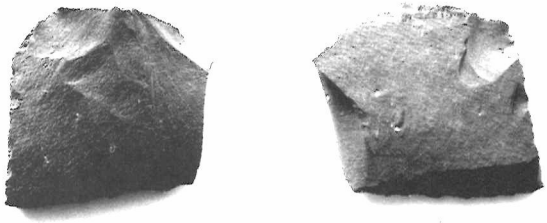


図 1.32
1.31 の左上の剥片

図 1.33
1.31 の右上の石核
敲打痕が認められ、剥片をとった後ハンマーとして利用したと思われる .

図1.34　上の土器をモデルに製作を試みた.

1.4　第Ⅴ様式甕の製作技法の復原

楽音寺遺跡で出土した畿内第Ⅴ様式に属する壷、甕の底部裏面を観察したところ、平坦面の底やいわゆるドーナツ底、いびつなドーナツ底、爪形状の痕跡がある底が認められた。これらは、底部そのものの作出方法および粘土紐積み上げ、乾燥（中断）時間などの製作工程が関連しあった結果と考えられる。こうした製作工程における連鎖を明らかにすることは土器製作を体系的に理解するうえで必要である。ここでは、製作実験をおこない、製作工程と底部裏面

底部の作出方法（右図）
図1.35の底部は都出（1974）が述べている底部輪台に相当する.粘土紐を2～3段積み上げたところで内側の粘土を引き伸ばして輪を塞いだ.

図1.35　実験1

輪台（1.5cm程度の粘土紐を輪状にして径4cmの底を作成）

↓

図1.36　実験2

上面

下面

うずまき（2cm程度の粘土紐をうずまき状にし、径4cmの底を作成）

↓

粘土紐積み上げ（右図）
5～7段粘土紐積み上げ（積み上げⅠ）、1～2時間乾燥（乾燥Ⅰ）、3～4段粘土紐積み上げ（積み上げⅡ）、再び乾燥（乾燥Ⅱ）.
成形は粘土紐を積み上げた都度指で密着させ、数段積み上げた後タタキ板を使用した.

図1.37　実験1'

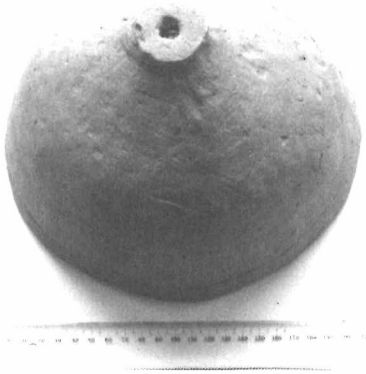
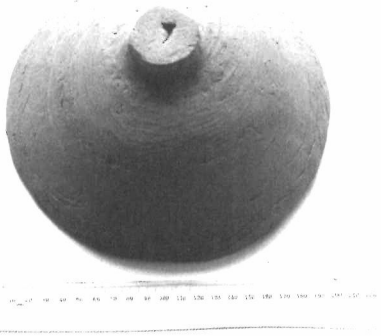


図1.38　実験2'



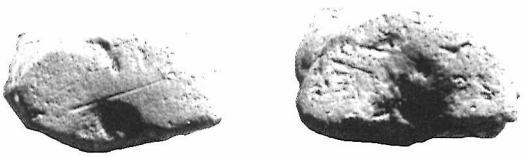


図1.36　出土土器底部

図1.37　出土土器底部

の痕跡との関連性を提示することにしたい。

図1.39　実験3

上面　　下面

平底（径5cmの円板を作成）

↓

図1.40　底部付近を叩いている状態

↓

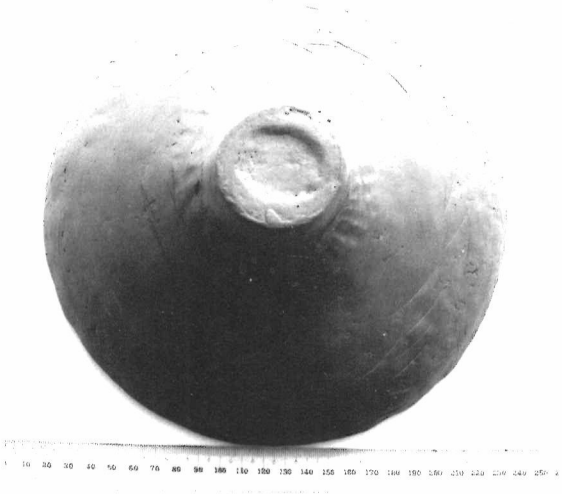
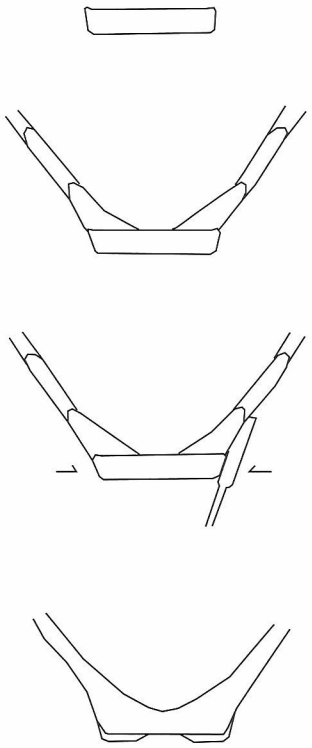


図1.41　実験3'

実験1・2と同じ方法で積み上げIまでおこなった.底部付近を左手で持ち上げ、徐々に土器を回しながらその都度右手で底部外面を叩くと、粘土が下方へはみ出す.そのまま土器を正置させ土器の上端を叩いて整える.はみ出した粘土は底部の裏へ送り込まれるのでドーナツ状の痕跡になる.この作業を繰り返しおこなうと、さらなる粘土のはみ出しにより再びドーナツ状の痕跡は消えて平底になる.

図1.42 ドーナツ底ができる過程



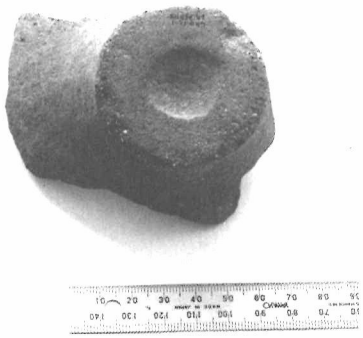


図1.43　出土土器の底部

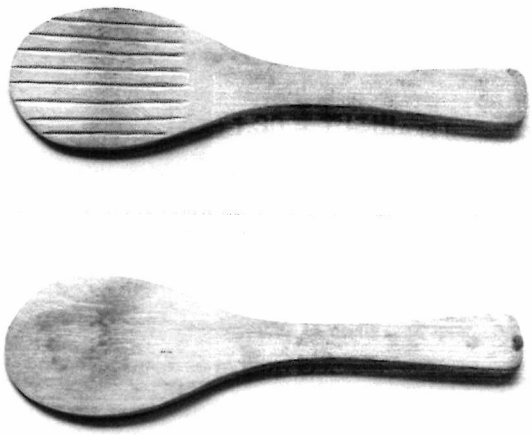


図1.44　飯箆の片方の面に溝を彫り、もう一方の面はそのままの状態にしたものを利用した.成形には溝のない面を、各工程の最終段階で溝を彫った面を使用した.内面の調整には飯箆の持ち手の先端を用いたところ、器面を平滑に、球形に整えることができ、板ナデ状の痕跡が認められた.ひとつの道具で三つの使途が可能であった.

1.4.1　土器製作工程と底部裏面の痕跡との関連性

製作実験から得られた知見をいくつか述べたい。

実験1～3の製作工程と製作時間の経過を表1にまとめた。

基本的に粘度紐積み上げと乾燥の繰り返しで土器を製作した。モデルにした中形の甕の製作は、1日目の午後から作り始めて翌日の午前中までの2日間にわたった。

積み上げIIは体部最大径より粘土紐1～2段低い位置までの積み上げが限界で、積み上げIIから積み上げIII（最大径）までの間に1時間程度の乾燥を設けて積み上げIII（最大径）をおこなった。モデルにした出土土器の観察においても、粘土の継ぎ目が最大径より粘土紐一段程度低い位置で確認できることと合致している。その後、一晩乾燥させたが、乾燥はいずれも土器を逆位置にしておこない、積み上げIII（最大径）までの製作において計三回必要とした。翌日、口縁部までの積み上げIVに1時間30分程度を要し、土器の完成に至った。

こうした製作工程と底部裏面の痕跡との関連を指摘すると、まず、底部裏面の痕跡はもともとの底部の作出方法に依存している傾向が看取される。次に、積み上げIの段階で、底部裏面を調整するか否かによって底部作出時の痕跡が残るかが左右される。積み上げIIから乾燥IIまでには3時間～4時間が経過しており、土器の硬度が増加しているため、上に積み上げた粘土の自重によって底部が変形することはもはやない。積み上げIの段階で、底部裏面が未調整であれば、底部作出時の痕跡がそのまま残ることになる。

底部の作出方法、タタキ技法、粘土紐の積み上げ、乾燥時間がそれぞれ影響しあった結果、いくつかの痕跡が表出されることが確認できた。厚手でしっかりしたいわゆるドーナツ底とよばれるものは、外側から叩いた圧力によってできる痕跡であることを確認し、都出（1974）が述べるように底部内面の粘土に依拠する方法とは痕跡が異なることがわかった。都出が提示したドーナツ底に関する製作技法については、技術的観点から関川（1976）、藤原・森岡（1977）、

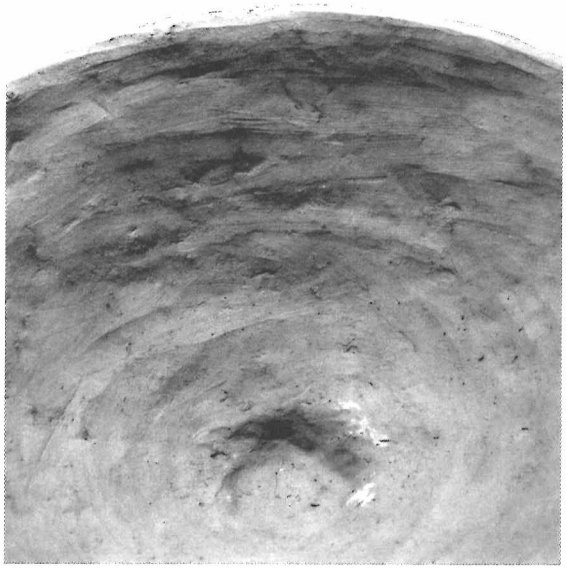


図1.45　実験内面

図1.46　最大腹径より粘土紐一段低い位置で継ぎ目が観察できる.

井上（1983）からも否定的見解が提示されている。

また、図1.46のようなドーナツ底が出土しているが、土器の観察から、底部にかなりの粘土の自重がかかり正置が困難な状態であったと推測される。製作実験をおこなったいずれの痕跡とも異なり、藤原・森岡（1977）が述べている底部裏面に粘土紐一本を貼り付ける底部再成形技法の可能性がある。このような粘土の自重が予想される事例は、今回の製作実験とはまた違った製作工程の時間配分が考えられる。特に、乾燥時間の長短、有無などが影響しているものと推測される。

図1.47　底部再成形技法と思われる出土土器底部

1.4.2　タタキ技法とタタキメについて

畿内第Ⅴ様式に属する甕の基本的な成形方法は、出土土器の断面および器面から観察されるように粘土紐積み上げ技法によるものである。実際に製作をおこなった際にも1.5cm程度の粘土紐を積み上げて製作した。タタキは成形作業の補強として、また、径を大きくすることに効果的な技法であり、さらに、積み上げた粘土紐同士を指ではなく板で接着させることにより、密着を強固なものにすると同時に、作業の簡素化をはかることにも有効な技法であった。特に、粘土紐同士を指ではなく板で接着させる作業の簡素化については、最大径より上部の積み上げをおこなう場合に効果的であった。

今回、土器製作中にタタキ技法をおこなったところ、その方向、回数などはその都度異なり、それを逐一記憶することは不可能であった。エスノアーケオロジーの手法でフィールドワークをおこなっている後藤（2001）は、同じ工程内で何度も繰り返される作業について、「どの作業をどのような順で何回お

時間の経過	実験工程	技法	
底部の作出			
	↓		
30分	積み上げⅠ	5～7段	指とタタキ板を併用
	↓		
2時間	乾燥Ⅰ		土器を逆位置にする
	↓		
2時間45分	積み上げⅡ	2～4段	
	↓		
3時間45分	乾燥Ⅱ		土器を逆位置にする
	↓		
4時間10分	積み上げⅢ（最大径）	1～2段	指よりタタキ板を多用
	↓		
乾燥Ⅲ（一晩）	土器を逆位置にする		
	↓		
1時間30分	積み上げⅣ	5段程度	指よりタタキ板を多用

表1　実験工程

こなったかは毎回違い、けっして一回の作業で仕上げることはない」と報告している。同様に、「土器の表面に遺される叩痕は必ずしも整然とした痕跡となるものではない」ことは高橋（1988）によってすでに述べられている。さらに高橋は、整形と器壁強化を目的とした叩技法とは明確に区別して理解する必要性を述べている。重複がみられないタタキメは成形工程の最終段階におこなわれるもので、前段階には粘土紐を数段積み上げた後に無文板によるタタキを用いて、器壁を補強し整えていたとも考えられよう。各成形段階ごとに方向が異なるタタキメやいわゆるラセンタタキと呼ばれるタタキメのいずれについても、タタキメで仕上げる意識をもたずに一定の方向を保つことは難しい。

1.4.3　まとめと展望

以上のことから、1)底部裏面の痕跡から作出方法を知ることが可能であること、2）成形は粘土紐積み上げ＋タタキの繰り返しでおこなわれるが、製作者や製作される土器によって乾燥時間、製作時間、製作工程が異なる可能性が考えられること、3）タタキメで仕上げるという共通の意識をもちながら、その道具の選択には個人あるいは集団の独自性が保持されるであろうこと、などの見通しが得られたように思う。

ひとつの遺跡から出土した土器について、観察および実験からいくつかの製作手法が混在していることがわかった。異なった底部のつくりかたを経て結果的に第Ⅴ様式甕と呼ばれる土器がかたち作られる実験例は、いくつかの解釈を提示することになる。つくりかたの違いは製作した集団や集落の違いを示すものであるのか、個人の癖や独自性＝「製作者」を示すものであるのか、それらがどのような組み合わせで表出するのかは、当時の社会における土器作りシステムを考えるうえで重要なことと思われる。

文献

井上和人（1983）「布留式」土器の再検討.「文化財論叢」,奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会.

後藤明（2001）Ⅱ物質文化の探求.「民族考古学」,勉誠出版.

関川尚功（1976）

高橋譲（1988）弥生土器の製作に関する基礎的考察.「考古学と関連科学」,鎌木義昌先生古稀記念論集刊行会.

都出比呂志（1974）古墳出現前夜の集団関係.「考古学研究」第20巻第4号,考古学研究会.

藤原学・森岡秀人（1977）考察Ⅳ 弥生遺跡に伴なう焼土壙について－大師山遺跡1～4号焼土壙のもつ意義.「大師山 河内長野」,関西大学文学部考古学研究室.

第2章　楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序

―共同住宅建設に伴う第２次発掘調査報告

2.1　はじめに

東大阪市南東部，横小路町４丁目1008-63の楽音寺遺跡範囲内で，大東建託株式会社によって共同住宅の建設が計画されたが，埋没遺跡が建設工事によって破壊されるおそれがあったため，大東建託と東大阪市教育委員会は協議を行い，前者が建設工事に先だつ発掘調査を財団法人東大阪市文化財協会に委託して実施することになった．現地調査の期間は1995年（平成７年）１月17日から２月３日で，調査面積は123 m^{2}であった．

発掘調査の結果，おもに弥生時代後期以後の遺構，遺物が検出され，堆積層と土壌の検討にもとづき，調査地とその周辺の微地形発達過程や土地利用の特徴を推測できた．

2.2　楽音寺遺跡

楽音寺遺跡は，八尾市北東部の楽音寺地区の名をとった遺跡で，同市の市境を越え，東大阪市横小路町南西隅まで拡張された南北300m，東西350mの行政上の領域を指す．本遺跡は，東方の生駒山地と西方の沖積低地との間に発達した沖積扇状地緩斜面にあり，標高は15～20m（図2.1，図2.31も参照）．埋没遺跡を含む表層地質の形成過程や年代についてはほとんど検討されてこなかった．現地の踏査や空中写真の判読などから知られる地形条件は，2.7に述

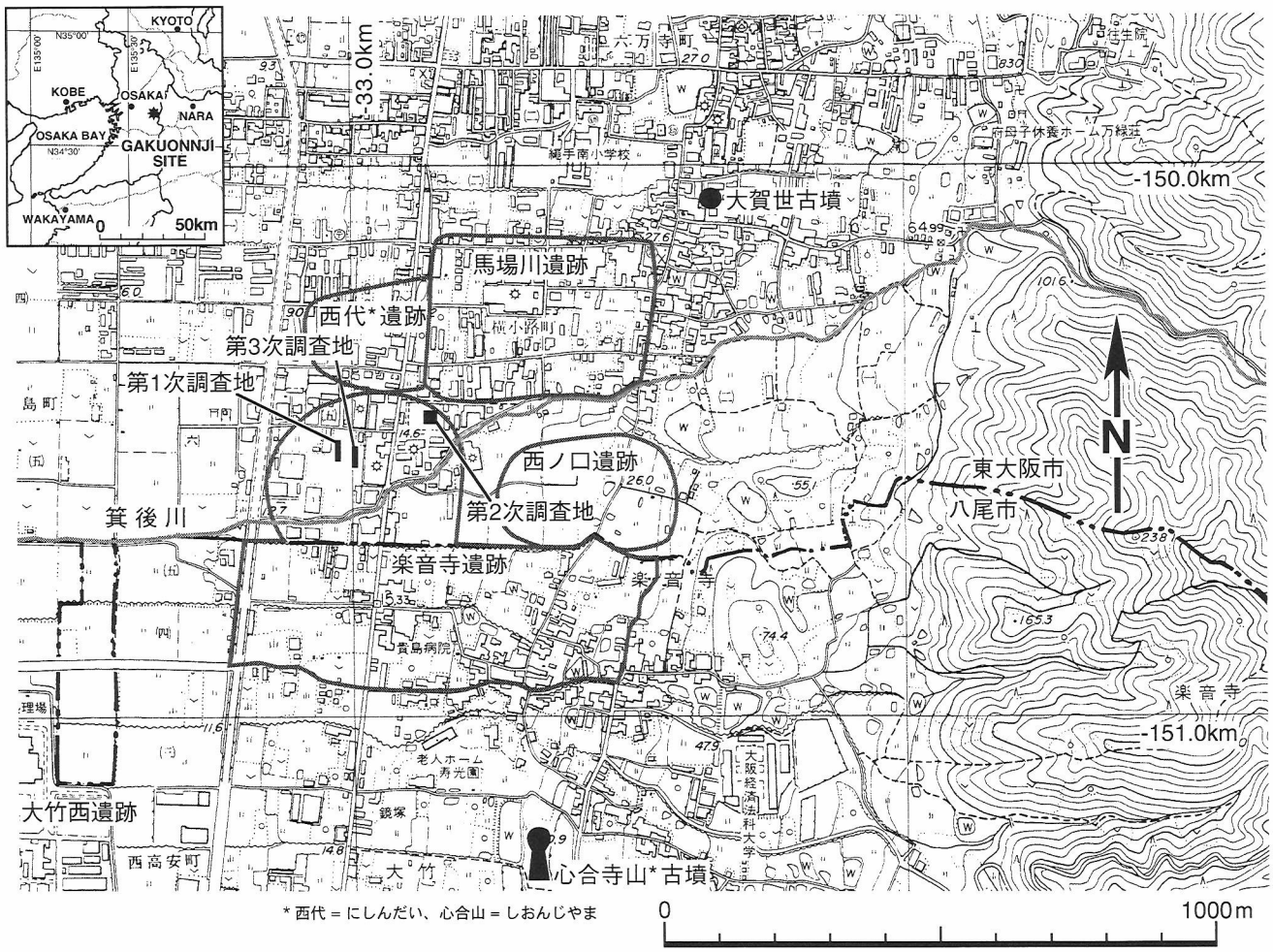


図2.1　楽音寺遺跡，第2次発掘調査地の位置，周辺の遺跡分布と地形図．縄文時代から古墳時代にかけての考古資料を多産する地域だが，各時代の景観復元はなされていない．

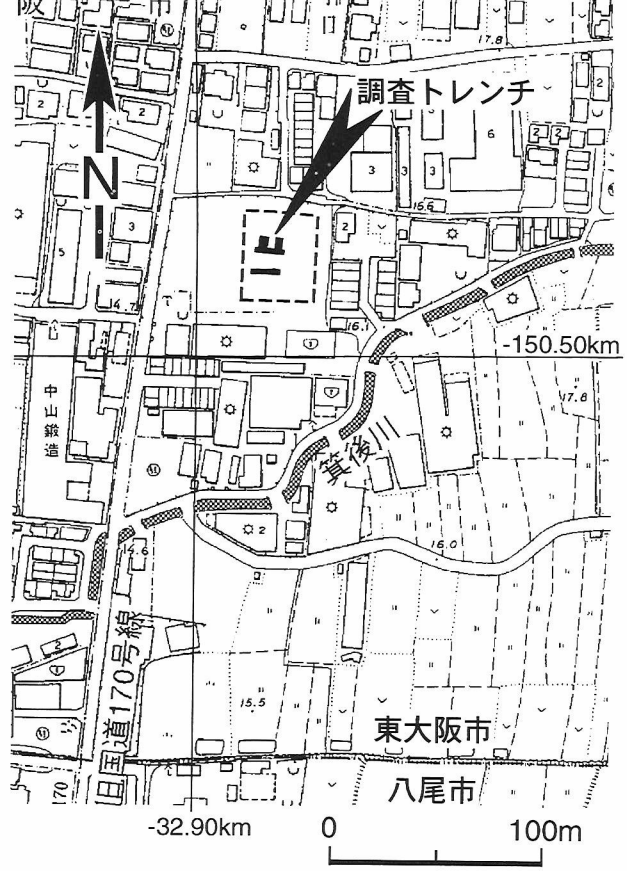


図2.2　調査トレンチの位置図．破線は共同住宅が建設されたおよその範囲を示す．調査地の西に隣接する旧国道170号線までの領域は，調査後切土され駐車場になった．

図2.3　調査前の共同住宅建設予定地．1995年1月15日．南東方向に撮影．

べる．

八尾市域では，楽音寺集落周辺で，古墳時代初頭の遺物を含む堆積層や，平安時代の井戸などが検出されている（八尾市文化財調査研究会 高萩千秋氏の御教示による）が，東大阪市域では発掘調査は行われていなかった．1995年に本遺跡範囲内で共同住宅建設にともなう第1次発掘調査(本書第1章)が，第2次調査地の西南西約250mでほぼ並行して行われ，弥生時代中期から古代にかけての遺構・遺物が検出された．また，第1次発掘調査地の約30m東では，1998年に第3次発掘調査が行われ，古墳時代前半から古代にかけての遺構・遺物がみつかった．

2.3　調査地の位置と掘削の概要

第2次発掘調査地は，本遺跡中央部を南北にはしる旧国道170号線（東高野街道）の東側沿道で，横小路町を北東から南西に流下する箕後川から北に約100m離れた位置にある．調査区は，試掘調査によって遺物を含む堆積層がみとめられた共同住宅建設範囲の西部（図2.2, 2.3）にあたり，基礎杭打設部分の一部とその影響範囲をつないで設定された南北2か所（北トレンチ，南トレンチと呼ぶ）であった．北トレンチは79.5m^2，南トレンチは43.5m^{2}であった（図2.4）．両トレンチでは，標高約16mの現地表面をなす層厚約1mの最近の盛土層をバックホウで除去し，その後人力掘削で遺構・遺物の検出を試みた．

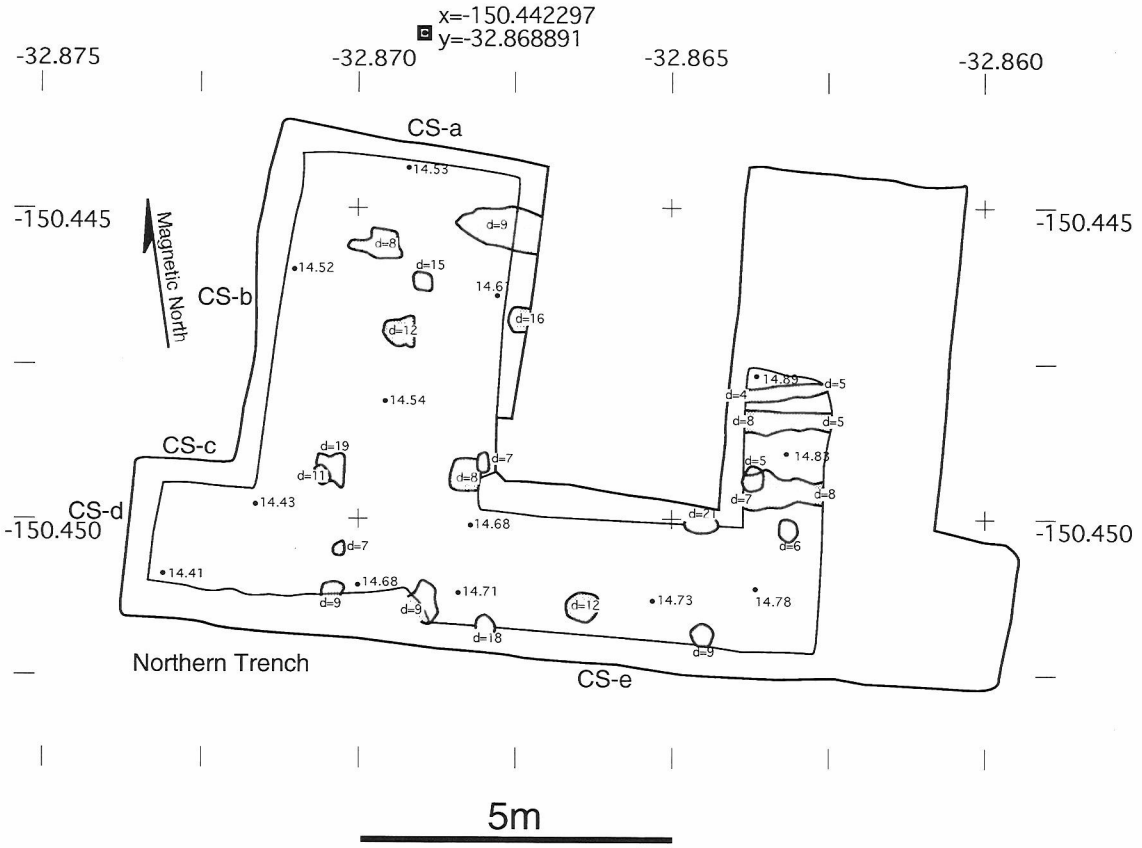
掘削が進むにつれ，試掘調査で注目された盛土直下の奈良-平安時代の遺物出土層は，近世以後に再堆積したもので，より下位の地表下1.2m付近の層準に古墳時代末から古代にかけて形成されたと考えられる遺構群が検出された．遺構の基盤をなす堆積層からは，弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が混在して出土した．さらに掘削をすすめた結果，地表下1.2～1.8mの垂直範囲に，堆積作用のきわめて緩慢で，植生が発達したことを示す土壌が，少なくとも2層準でみとめられた．北トレンチの北西隅と南トレンチの南西隅では，弥生時代後期から古墳時代の堆積物で充填された埋没流路の一部が検出された．また，より下位の堆積層を調べるため，トレンチ内の側溝を地表下2.3mまで，また南トレンチ東部の一部をバックホウで地表下約3mまで掘り下げ（図2.5），堆積層の累重を観察，記録した．

2.4　堆積層序と堆積物の特徴

調査時の地表面T.P.16.1mから，掘削底のT.P.13.3mまでにみられた堆積層について述べる．南北両トレンチで観察された堆積層の断面図を図2.6, 2.7に，それらの写真を図2.8～11に示す．また，図2.32に示した両トレンチの柱状断面図も参照されたい．

(1) 現地表面からT.P.約15mまでには、調査地全体に現代の盛土層が分布していた．

(2) この下位のT.P.約14.9mまでには塊状をなし，細粒の中礫以細の礫が



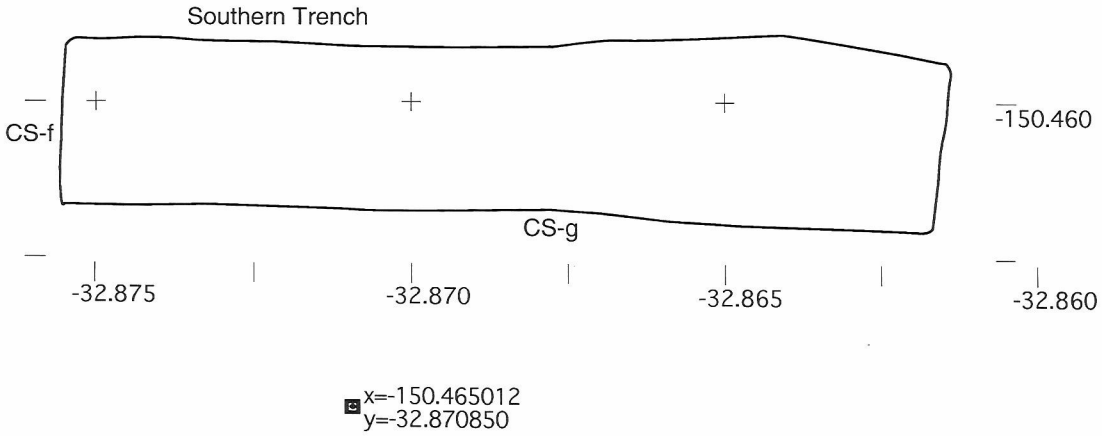


図2.4　調査トレンチの配置と北トレンチのEZ2,3の境界層準における遺構分布図. CS-a～gは各壁面の堆積層断面の略号. 図2.7, 8参照. dは遺構の深さ(cm)を表わす。

図2.5　南トレンチ東端部の下層確認掘削の状況. 南東方向に撮影. 人力掘削底より約70cmさらに掘削した. 写真にみられる断面の下半は, わずかに砂質のシルト質粘土, 上半は砂質シルトで, 上方粗粒化しており, 人力掘削底付近にひろがる礫質砂層に漸移する. スケールの一目盛り20cm.

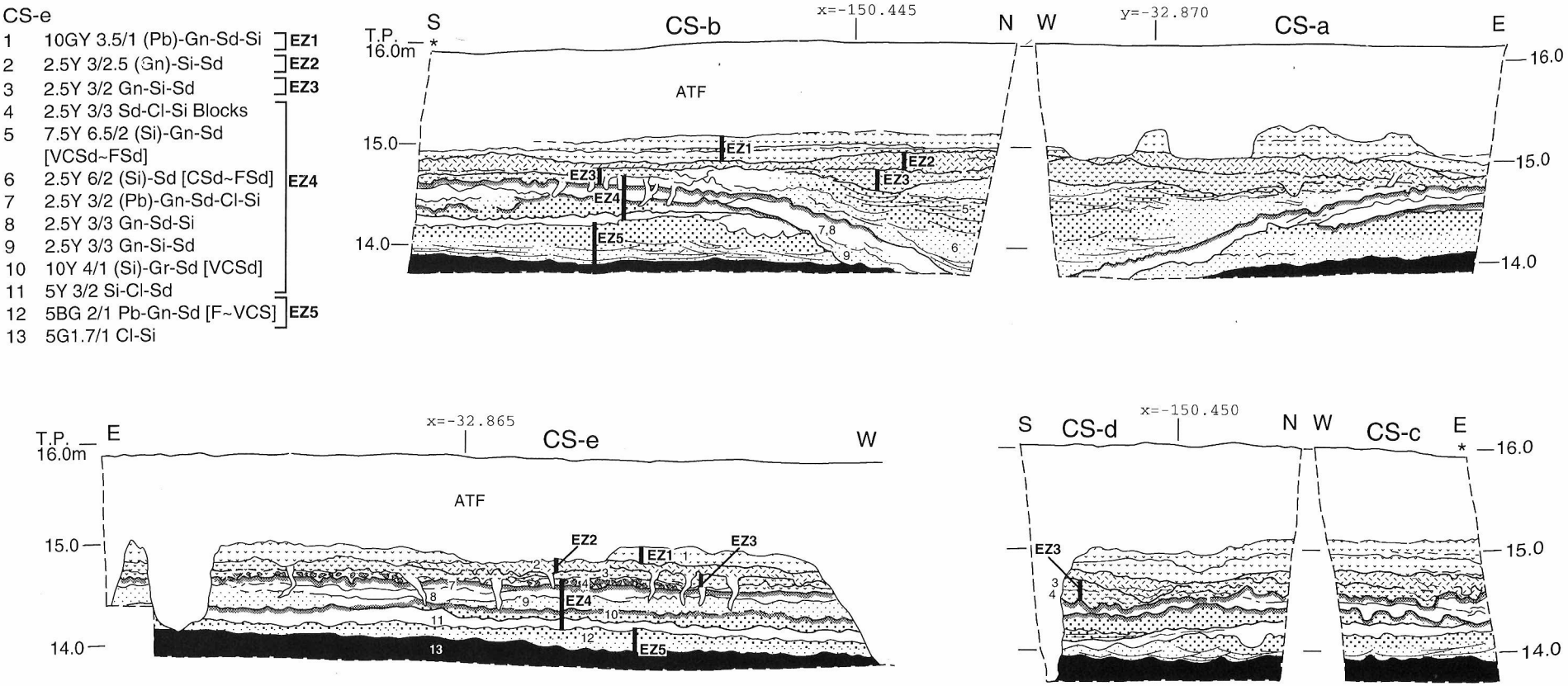
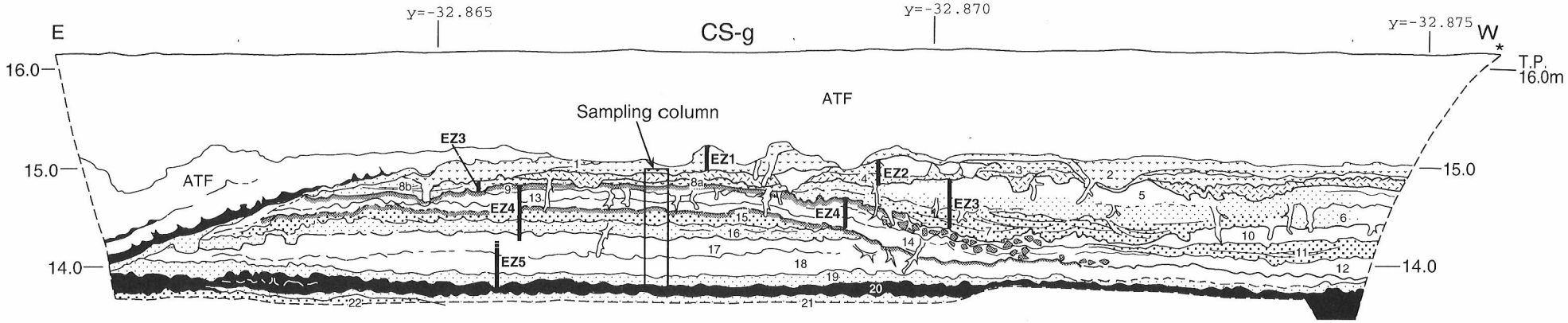


図2.6　北トレンチ西辺および南辺の堆積層断面図．断面の位置は図2.4を参照．凡例にはCS-eの各堆積層の層番号，色調（マンセル表記で，Y=黄色，B=青色，G=緑色，彩度/明度の順），粒度を示す．EZは遺構・遺物帯(ethnozone)．図2.7の凡例参照．断面位置は図2.4参照．



LEGEND

- Granular sand
- Relatively fine sand
- Slightly granular, muddy v.fine sand ~ sandy mud
- Organic matter-rich sandy mud
- Youngest cultivated deposit
- Older cultivated deposit
- Artificial Fill (consists of the older cultivated field deposit)

Granular sandy silt ~ silty sand

ATF Recent artificial fill

Remained uppermost part of the buried dark soil

EZ Ethnozone

PARTICLE SIZE ABBREVIATIONS

FPb: fine pebbles, Gn: granules,
Sd: sand, VFSd: very fine sand,
FSd: fine sand, MSd: medium sand,
CSd: coarse sand, VCsd: very coarse sand,
Si: silt, Cl: Clay

CS-g,f

1	2.5Y 4.5/2 (Gn)-Si-Sd ~ Sd-Si	EZ1
2	5GY 1.7/1 Gn-Sd-Si	EZ1
3	2.5Y 4.5/2 (Gn)-Sd-Si ~ Si-Sd	EZ2
4	10YR 4/3 Gn-Si-Sd	EZ2
5	5Y 4/3 Sd-Si ~ Si-Sd	EZ3
6	2.5Y3/3 Si-Sd[M~VFSd]	EZ3
7	2.5Y 4/3 Si-VCSd~FSd	EZ3
8a	10YR 4/3 Gn-Sd-Cl-Si	EZ3
8b	10YR 4/4 Gn-Sd-Si	EZ3
9	10YR 3.5/3 Si-Gn-Sd	EZ4
10	2.5GY 2/1 Sd-Cl-Si	EZ4
11	5G2/1 G-Sd[VCS~MSd]	EZ4
12	10YR 3/4 Si-Sd	EZ4
13	10YR 4/2.5 Cl-Si-Gn-Sd	EZ4
14	5GY 2/1 Si-Gn-Sd	EZ4
15	10YR 3/2 Si-Gn-(FPb)-Sd	EZ4
16	5Y 4/1 ~ 2.5YR 3/1.5 (Si)- Sd [F~VFSd]	EZ4
17	10YR 2.5/2 ~ 10YR 2/1 Sd-Si-Cl	EZ5
18	5G 1.7/1 Sd-Cl-Si ~ Sd-Si-Cl	EZ5
19	5G 2.5/1 Gn-Si-Cl-Sd	EZ5
20	5G 3/1 (Sd)-Si-Cl	EZ5
21	5BG 2/1 Sd-Si ~ Si-Sd	
22	5BG 4/1 FPb-Gn-(Si)-VCSd	

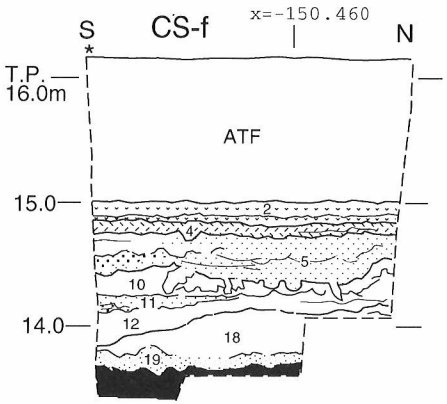


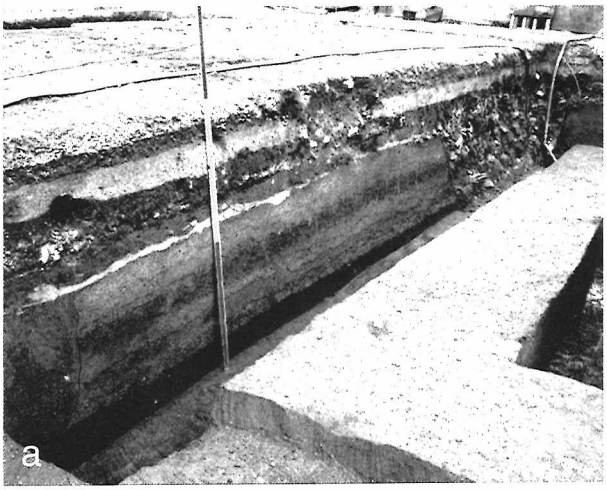
図2.7　南トレンチ南辺と西辺の堆積層断面図．断面の位置は図2.4を参照．

まじる淘汰のわるい砂質シルトが2，3枚累重していた（図2.6，1層，図2.7，1，2層）．これらは南トレンチで，溝や畦畔などの耕作地関係の遺構が検出されたこと，人為的な擾乱が原因とみられる微細な偽礫が多数みられることから，耕作土と考えられる．上位の盛土の堆積時に深く削られていないところではより新しい耕作土層が残存していた．本層の上位層準から下方にのびた，幅2～8cmの樹木の根の跡が多数みとめられた．盛土が載るまでの一時期，樹木が植栽されていたと考えられる．

(3) 南トレンチ東端部には，これらの堆積層の最上部と同時期で，下位層の累重を東に向かって深く掘り込んだ，溜池と考えられる落ち込みが検出された．落ち込みの下底には，中粒砂を主とする泥質砂とシルト質粘土がともに数cmまでの厚みで堆積し，その上位を中礫から細粒の巨礫サイズの砂礫質泥からなる偽礫が充填していた．南トレンチの中央部では，本層直下に厚さ10cmまでの，より古い耕作土層がみとめられた（図2.7，3層）．

(4) T.P.14.8m付近には，上面を削除された，層厚数～20cmまでの砂礫質シルトと礫まじりシルト質砂層が，北トレンチ東部をのぞく調査区全体に分布していた（図2.6，2層，図2.7，4層）．本層の大部分は塊状をなし，一部に数cm以細の偽礫や葉理がみとめられ，人為的な擾乱をうけている．偽礫は，角塊状で，大きさが不揃いなことから，盛土とも考えられる．

図2.8　北トレンチ南辺の堆積層断面（CS-e）.南西方向に撮影.（a）は断面全体.（b）は断面中央部のクローズドアップ．断面の高さはスケールの位置で約2.0m．最上部は現代の盛土層．中位の暗色部分の上端までは，古代から近代までの耕作土層と盛土層．中位のやや暗色の堆積層は，弥生時代後期から古墳時代前半までの堆積層で，土壌形成がみられる．その下位にやや明色の砂質シルト層を挟んで，さらにその下位にも弱い土壌形成層準がみとめられた．これらは弥生時代後期から古墳時代後期までの堆積層である．断面下端より約20～30cmまでが弥生時代後期の堆積層．その下位は弥生時代中期の堆積層と考えられる．写真中の番号は図2.6の堆積層番号に対応する．



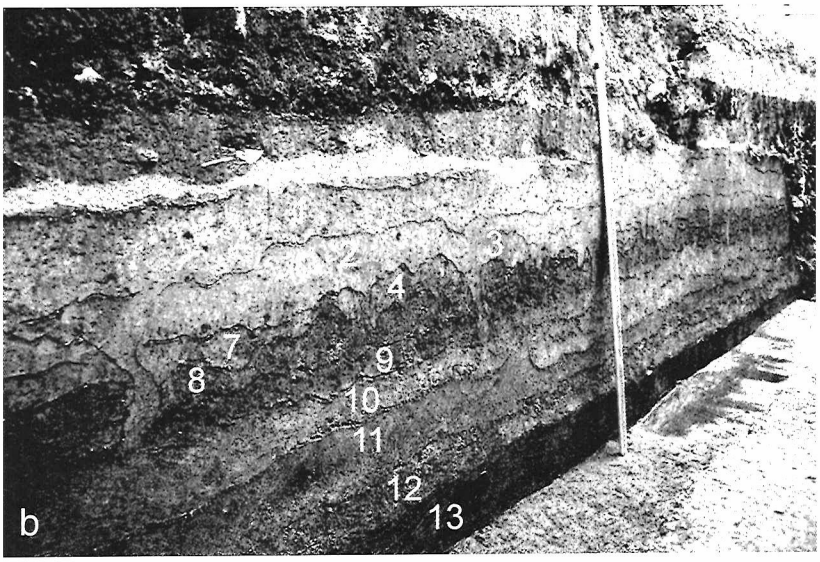


図2.9　北トレンチ北西隅で検出された埋没流路の断面（CS-a,b）．北西方向に撮影．流路は画面右から左方向（下流）にのび，トレンチ内では左岸側壁がみられる．断面は流路側壁を斜めに切っているので，見かけの印象より傾斜は急である．泥質砂～礫質砂によって充填されており，上方粗粒化する．砂泥側溝底から断面上端までの高さは約2.2m．写真中の番号は図2.6の堆積層番号に対応する．

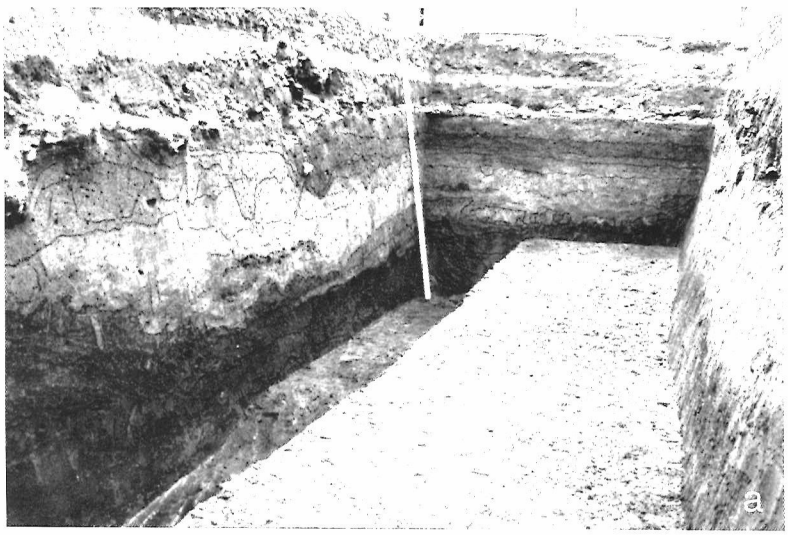
以上の（2）～（4）の盛土および耕作土の材料は，調査地の位置する扇状地ロウブ上の氾濫堆積物と考えられる．

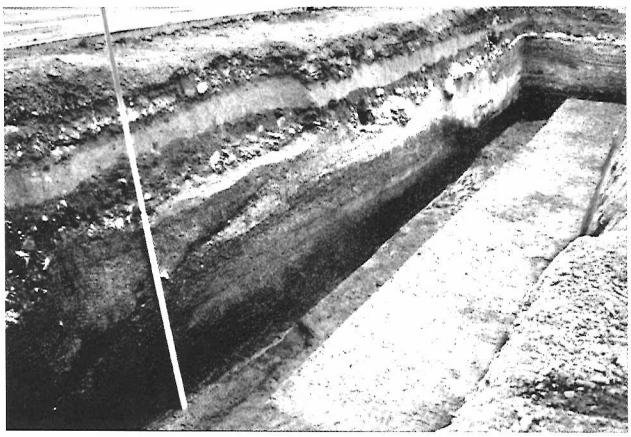
(5) 北トレンチのT.P.14.7～14.8mには，大部分で塊状をなす砂礫質粘土質シルト（図2.6，3層）が全体に分布していた．南トレンチでも，同高度の層準に層厚8cm以下の同様な堆積層がみとめられた（図2.7，8a層）．本層は人為的な擾乱を受けており，数cm以細の偽礫が多くの場所で識別された．耕作土と考えられる．南トレンチの砂礫質粘土質シルトは東方へはやや粗粒化し，砂礫の葉層が数枚挟まれた砂礫質シルト（8b層）に側方変化する．南西方へは，本層下部が，比較的粗粒な砂質シルト層とシルト質砂層（図2.7，5～7層）．に側方変化し，埋没流路の中・上部を充填していた．

北トレンチでは，3層下部あるいはその直下の堆積物が流路中・上部の，わずかにシルト質砂層（北トレンチCS-a,b，6層），わずかにシルト質礫質砂層（同断面，5層）と同時異相をなす．ただし，流路充填堆積物の最上部の，深さ約20cmのトラフ型のくぼみを3層が充填している部分（北トレンチCS-b，右寄り）があり，本層の耕作土としての利用は流路の充填が終わった後も継続したと考えられる．

(6) 北トレンチのT.P.14.6～14.7m付近，南トレンチ中央部のT.P.約14.8mの層準には，有機物に富み，暗色を呈するシルト質礫質砂の偽礫層（図2.6，7

図2.10　南トレンチ南辺と西辺の堆積層断面（CS-f,g）．断面の高さは，東部で約2.4m．上部1.1mは現代の盛土層．それより下位では溜池を充填する近現代の砂質泥が下位層を切り，斜交して載る．西半部の大礫クラスまでのコンクリート屑の直下にみられる明るい色調の堆積層は，古代から近代までの耕作土層と盛土層．断面中位のやや暗色の堆積層は，弥生時代後期から古墳時代前半までの堆積層で，土壌形成がみられる．その最上部と，断面西辺の流路を充填する砂および砂質泥は同時異相．最下部の濃い暗色部は，弥生時代中期（推定）から後期の泥層と砂層．





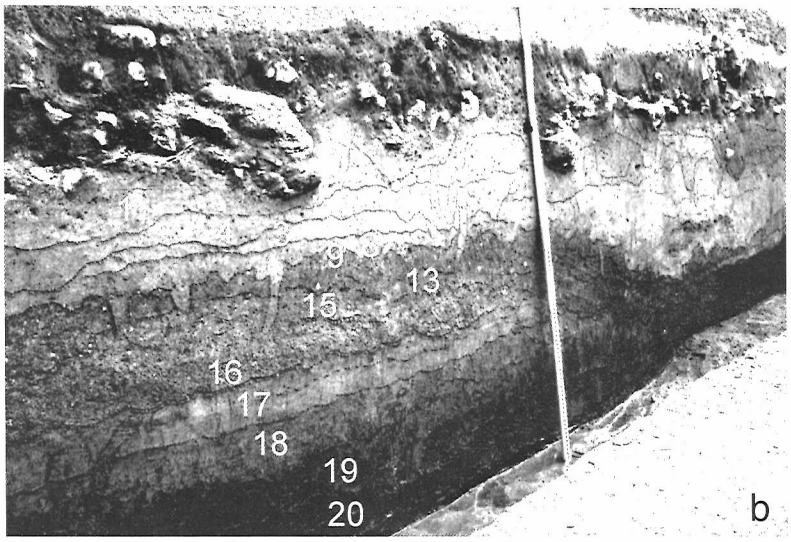


図2.11 南トレンチ西辺と南辺西部の堆積層断面（CS-f,g）．南西方向に撮影．(a)の画面左端がほぼ(b)のスケール位置．（a）南トレンチ南西隅で検出された埋没流路の断面．古墳時代前期から古代にかけての礫～砂質堆積物で充填されているが，流路縁の堆積物で，澪筋のさらに粗粒な堆積物が調査区外に分布するものと考えられる．流路充填堆積物のなかには，土壌化した氾濫原堆積物のブロックがレンズ状にはさまる．断面の高さは約2.6m．(b) 流路と氾濫原の堆積物の累重関係が観察され，流路は少なくとも2回の充填と下刻を繰り返したことがわかる．写真中の番号は図2.6の堆積層番号に対応する．スケールの彩色区分1m．

層，図2.7，9層）がみとめられた．本層の特徴は，この層準の直上からの土壌形成があったことを示す．北トレンチの南部では，本層の上部が擾乱されて生じた，数cm以細の偽礫が分布していた．また，南トレンチ東寄りの平坦面でも，9層上部は，ほぼ全体に中礫以細の偽礫が分布していた．これらの堆積層は上述の埋没流路側壁斜面にも連続していた．南トレンチでは流路内に大礫サイズの偽礫が目立った．

(7) 上述の，偽礫層の下位には，上位層とともに擾乱されたように見える堆積層が残存していた．層厚約15cmまでで，よく似た粒径組成の2，3枚の堆積層が累重していた（図2.6，8層，図2.7，13層，14層）．この層準は土壌帯の下部にあたり，さほど暗い色調ではない．北トレンチでは，比較的粗粒な細礫まじりシルト質砂層が，南西部に分布していた（図2.6，9層）．

以上の堆積層（図2.6，7層，8層，9層，図2.7，9層，13層，14層）の側方変化はあまりなく，両トレンチの流路内に連続してみとめられた．ただし，南トレンチでは流路充填堆積物の堆積時に上位の13層が侵食され，14層のみが流路側壁に分布していた．

(8) 北トレンチのT.P.14.3～14.4m，南トレンチのT.P.14.6m付近の層準にも，10～15cmの垂直範囲に，土壌形成を示唆する暗色部分がみとめられた．この層準の堆積層は，両トレンチともにほとんどの部分でわずかに細粒の中礫を含む，泥まじり礫質砂層（図2.6，10層（11層），図2.7，15層）であった．北トレンチの11層最上部から10層，南トレンチの15層は，逆級化成層をなし，近傍の流路からの氾濫堆積物ないしは扇状地ロウブの斜面の布状洪水の堆積物と考えられる．南トレンチ，16層は比較的淘汰のよい印象のある，わずかにシルト質の細粒砂～極細粒砂（のちの分析では極粗粒砂～中粒砂を予想外に多く含んでいた）である．

(9) これらの下位には，北トレンチではT.P.14.3～14.4mに泥がちなシルト質粘土質砂層（図2.6，11層），南トレンチでは，T.P.13.9～14.3mに比較的砂がちな砂質シルト質粘土層（図2.7，17層，18層）がみられた．両トレンチ間の10mあまりの距離での同時異相で，上位の砂層と合せて，上方細粒化する一連の累重とみなせる．さらに，本層の下位には，北トレンチでは層厚10～40cmの細粒の中礫以細の礫がまじる砂層（図2.6，12層），南トレンチには細礫まじり泥質砂層（図2.7，19層）がみられ，上位層と同じく南方に側方変化し，細粒化するとともに，薄層化している．本層は，古流向にほぼ直交する北トレンチ北西隅，西辺の断面では浅いトラフ型斜交葉理をなし，下位の泥層の上部を侵食し，北西側に深度を増し，より下位の流路を充填しているように見えた．本層と上位の泥質砂層や砂質泥層は，北トレンチの北西側に想定される流路中央部からの氾濫堆積物と考えられる．北西隅，西辺の断面では12層上面に，起伏のある侵食面がみられ，上述の流路充填後，それをふたたび下刻した流路があると考えられる．

(10) 北トレンチでは，T.P.14.1m付近から掘削底のT.P.13.8mまで，南トレンチではT.P.13.8m付近の層準に，層厚10～20cmで，有機物に富み，グライ化して暗緑灰色を呈する，わずかに砂質シルト質粘土～粘土質シルト層がみと

められた（図2.6，13層，図2.7，20層）．この上面は，北トレンチでは，北西方向にわずかに低く，トレンチ北半では，すでに述べた上位の礫質砂層の堆積によってわずかに侵食されていた．本層は南トレンチでの高度からみて，南方へも高度を下げ，その泥層の上位層との層界は，高さ10cm，幅30cmまでの凹凸をなし，多くの場所で漸移的であることから，上位層準からのなんらかの擾乱あるいは変形を受けていると思われる．

（11）南トレンチではこの下位に，層厚10cm，級化成層をなし，わずかにシルト質の礫質砂層（図2.7，22層）が伏在する．この上部の比較的細粒な部分には，不明瞭だがカレントリップルがみとめられた．また，粗粒な下部には，浅いトラフ型斜交葉理をなす部分があった．本層の下位には，さらに上位層と同様，さらに細粒のシルト質粘土層がみとめられた．

以上（10）（11）の泥質堆積物は，流路からの砂礫を主とする粗粒な氾濫堆積物が，供給されにくく，間欠的であれ比較的継続的に滞水する低平な場所の堆積物と考えられる．

2.5　遺構・遺物帯（EZs）

本調査で検出された遺物の相対年代と，それらの検出層準から，すでに述べた堆積層の累重を，5つのゾーンに区分した．これらをStein（1987）にしたがい，遺構・遺物帯（ethnozoneの意訳，以下EZと略す）と呼ぶ．EZの境界は，堆積層の境界とほぼ一致することが多いが，そうでないこともある．一般に一つのEZは必ずしも1枚の堆積層に対応しない．複数の堆積層を含む場合と，1枚の堆積層の一部を占める場合とがある．以下に各EZに含まれる遺構・遺物について述べる．岩相層序との関係は，図2.6，2.7に示した．

EZ1（中世以後）

南トレンチの現代の盛土層直下には，数枚の耕作土層がみとめられる．その最上部の耕作土層は，西部と東部のトレンチ中央寄りに分布し，西部ではその下底に2,3条の溝が耕作地を画するかたちで南北方向にのびていた（図2.12）．これらと同トレンチ東端部の溜池状の落ち込みとは，圃場への導水施設と考えられる東西方向の管路でつながれていた（図2.13）．導水管は瓦製で，一端の径が小さい半裁管を2本組み合わせて連結し，管路を構成していた．管路は耕作地面下のより古い盛土(あるいは耕作土)に埋めこまれていた．近世以後の遺構と思われる．本帯の耕作土層からは，古墳時代以後の須恵器，土師器，瓦，瓦器などの破片が出土した（図2.14）．

EZ2（古代～中世）

本帯は上述した耕作土層を材料とする塊状の堆積層に相当する．人為的な擾乱を受けており，盛土あるいは耕作土と考えられる．遺構は検出されなかったが，南トレンチの本帯を構成する本帯下端部の凹凸は耕作痕跡と考えられる．出土遺物は弥生時代後期から中世（あるいは近世）までの土器片であった（図2.16）．

EZ3（古墳時代後期～古代前半）

断面観察の結果，本帯には柱穴や溝と考えられるくぼみが多く，切り合い

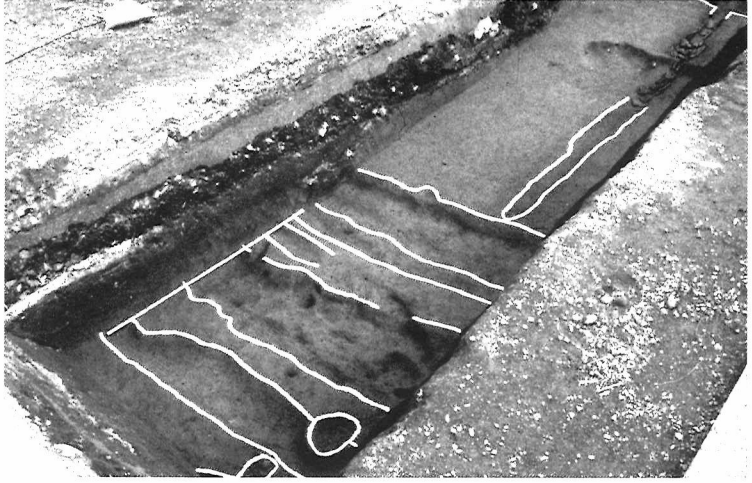


図2.12　南トレンチのEZ1，近世～近代の耕作地跡の検出状況．北東方向に撮影．画面奥(東端)より溜池，瓦管の導水路，耕作地の溝（溝状の落ち込み）など．溜池，導水路，もっとも東側の溝は同時期．手前の２本の溝はより古い．

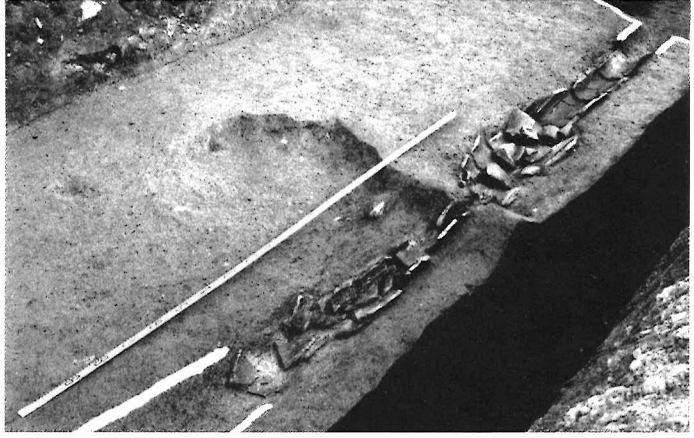


図2.13　南トレンチ南部，EZ1上部の近世～近代耕作地跡の瓦管導水路の検出状況．北東方向に撮影．画面右上以東にある溜池から本トレンチ西端部の耕作地への導水に用いられた．南北方向にのびる削り出しの畦畔部分の管路の保存状態がよく，あらたな耕作地の改変で管路が破壊，廃棄されたと考えられる．スケールは約2m．

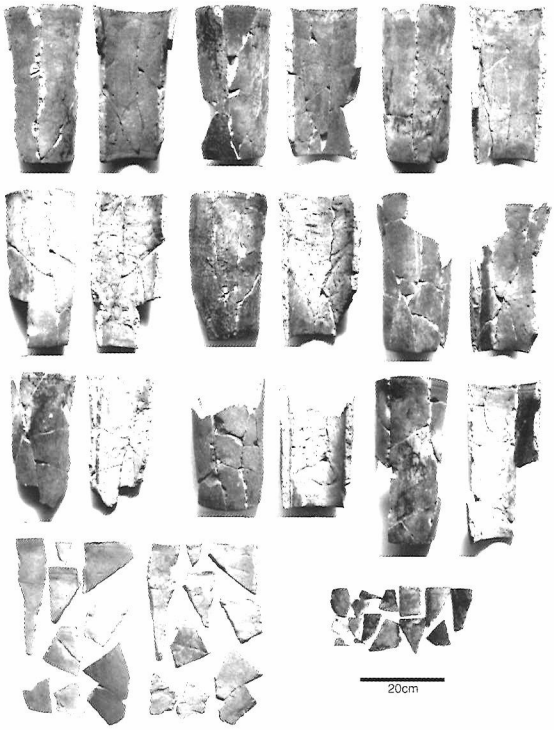


図2.14　南トレンチ南部，EZ1上部の近世～近代耕作地跡導水路の瓦管．a～jはそれぞれ１個体の外面（左側）と内面（右側），下流側の管の大径部（写真では状端部）に上流側の管の小径部を挿入し，連結されていた．採集された瓦管のほとんどは，ほぼ水平に設置された上半部が破壊され，その破片は失われていた．最下段の資料は残存した下半部に落ち込んでいた破片．外面はナデ調整，内面は細かい布目圧痕．上下両端部内外面に太い沈線状の圧痕がめぐり，その周辺はヨコナデが施されている．近世の遺物と考えられる．

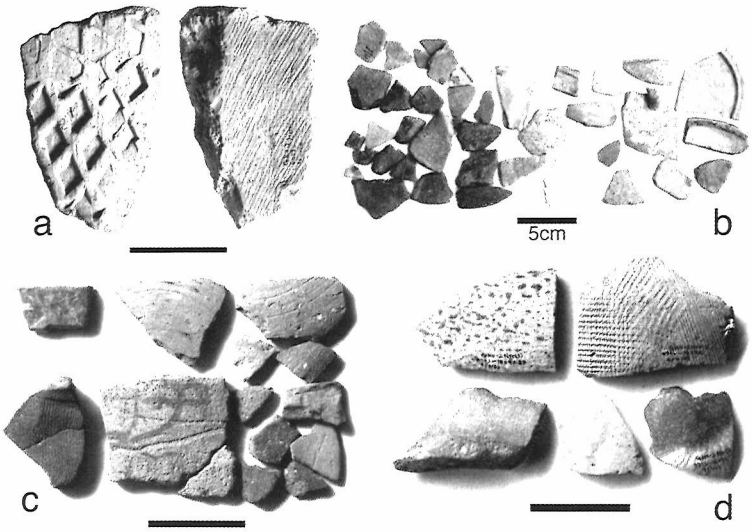


図2.15　南トレンチ，EZ1（CS-e，1層，CS-g，1，2層）から出土した瓦と土器．a: 瓦破片，b,c,d: 須恵器，土師器破片．古墳時代から中世の遺物が含まれる．スケールバーはすべて5cm．

がみとめられることから，複数の遺構形成面が想定される．しかし，遺構のくぼみを充填する堆積物が近傍の堆積物とほとんど同じで，明瞭な層界や構造を識別できなかった．作業上の検出面は，EZ4の直上であった．北トレンチのこの検出面で，耕作痕跡と考えられる溝群と，掘立柱建物跡を構成するピット群が検出された（図2.4，図2.17～20）．掘立柱建物跡は溝群を切っており，前者は掘削時の印象では，本帯上部から形成されたと思われることから，奈良・平安時代に耕作地が建物敷地に改変されたのであろう．溝群は耕盤に残されたもので，本帯を構成する堆積物が作土であったと考えられる．本帯からは，わずかに弥生時代後期以後の土器片をともない，古墳時代後期末から古代（7～8世紀）までの土器片が出土した（図2.21）．

EZ4（古墳時代前期）

南北両トレンチで，EZ3直下から下方に約40cmの垂直範囲の最上部と中位に暗色を呈する土壌帯がみとめられた．最上部の土壌帯は泥質砂礫～砂礫質シルトを母材とし，人為的に擾乱され，調査区のいたるところにブロック土が分

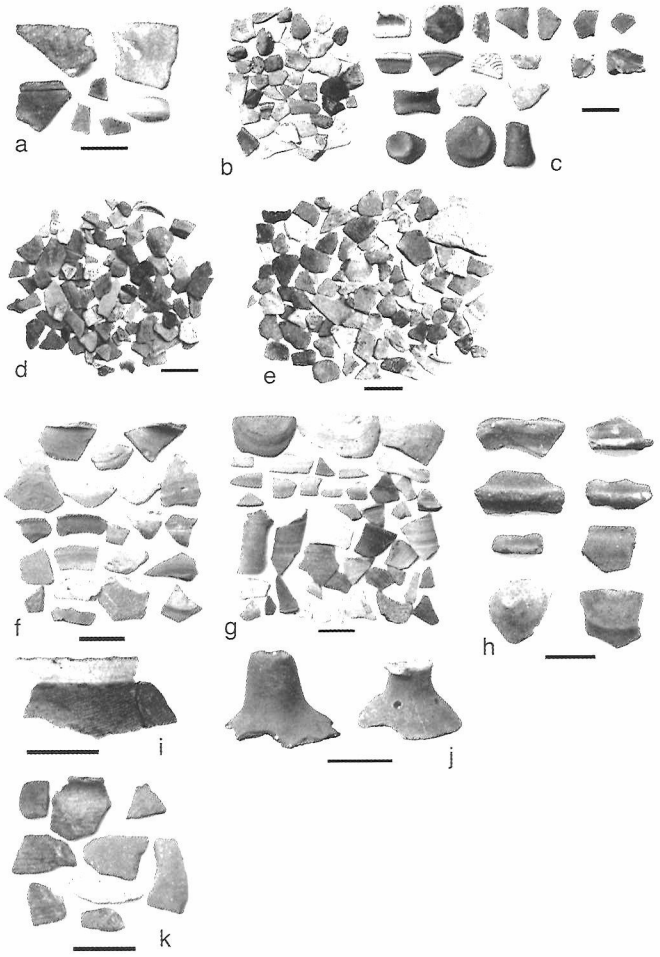


図2.16　南北両トレンチ，EZ2（CS-e，2,3層，CS-g,f，4層）の出土遺物．a: 瓦，瓦器椀，磁器の破片．b: 弥生土器，土師器，須恵器の破片．c: 須恵器，瓦，土師器，弥生土器の破片．d,e: 弥生土器，土師器の破片．f,g: 古墳時代後期以後の須恵器破片．h: 古墳時代前期以後の土師器破片，かまど，羽釜，高杯の破片．i: 古墳時代前期の土師器（庄内式甕）．j: 弥生時代後期の高杯脚部破片．k: 弥生時代後期の甕，壷の破片．スケールバーはすべて5cm．古墳時代中期の遺物らしき破片はほとんどない．

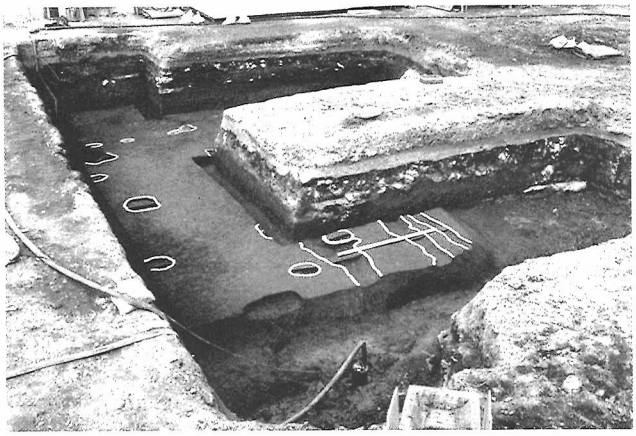


図2.17　北トレンチ，EZ3の遺構．EZ4直上での検出状況．北西方向に撮影．スケールは1.15m．

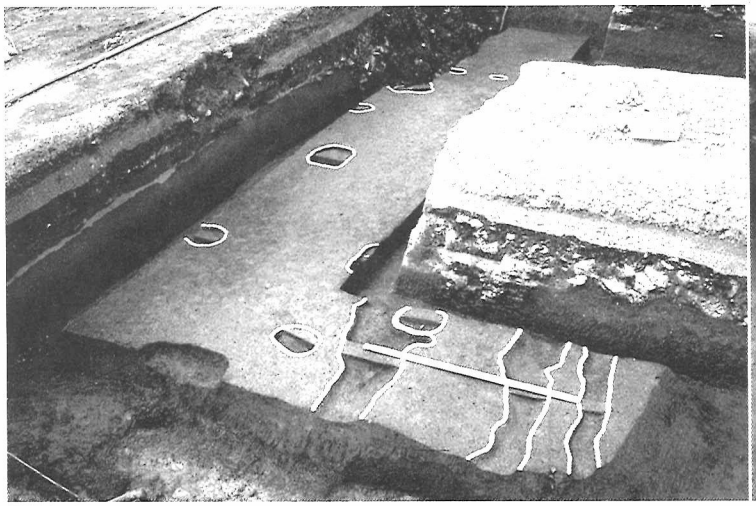


図2.18　北トレンチ東部，EZ3の溝群とピット群の検出状況．南西方向に撮影．写真手前の3本の溝は，耕作にともなう鋤跡だが，柱穴に切られており，古代の建物が建てられる前には耕作地であったと考えられる．南壁沿いに柱穴が並ぶ．スケールは1.15m．

図2.19　北トレンチ南部，EZ3の遺構検出状況．ピット列は正確には直線上に載らないが，柱穴と考えられる．スケールは1.15m．

図2.20　北トレンチ西部，EZ3の遺構検出状況．本トレンチ南辺のピット列に直交するピット列を，不明瞭だが想定できる．スケールは1.15m．

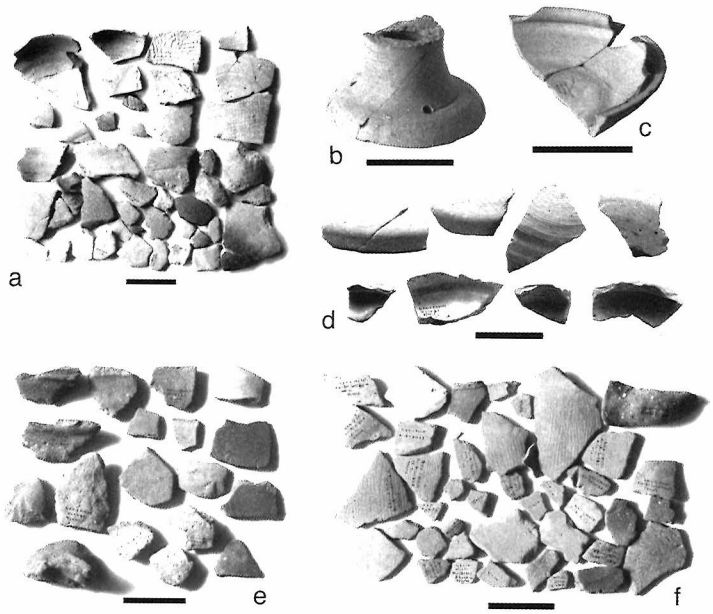
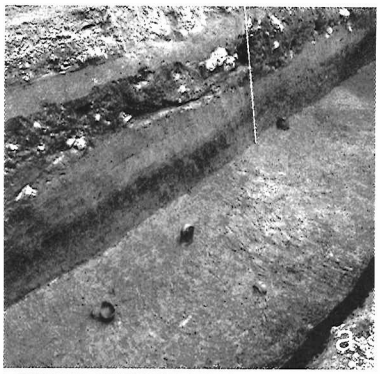
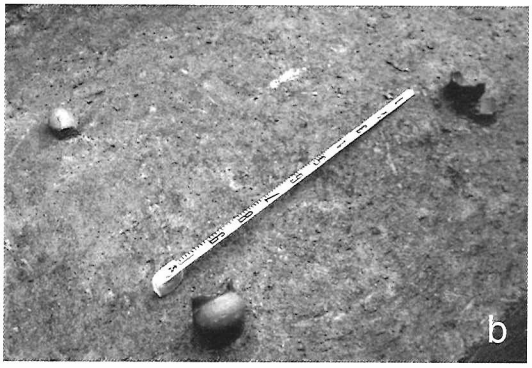


図2.21　南北両トレンチ，EZ3（CS-e，4層，CS-g，7，8a,b層）から出土した土器片．a: 古墳時代後期以後の須恵器（坏，坏の蓋，甕，壷など）．b～d: 古墳時代後期末（6～7世紀前半）の須恵器（高杯脚部，坏と坏の蓋）．e,f: 古墳時代から古代の土師器破片（羽釜，甕，かまど，甑など）．わずかに弥生土器片がまじる．スケールバーはすべて5cm．

図2.22　北トレンチ，EZ4（CS-e，11層）の古墳時代前期土器の出土状況．a: 南西方向に撮影．画面奥の断面際には，下位層に含まれる弥生時代後期の土器がみられる（図2.25参照）．b: 同じ土器の出土状況を北東方向に撮影．スケールは1m．





布していた．中位の土壌帯は，約20cmの垂直範囲で，本帯下部より砂質泥，泥質砂，泥質砂礫の順で上方細粒化した堆積物の上部を母材とする．両土壌帯とそのブロック土は，南北両トレンチの一画で検出された流路側壁斜面まで連続してみとめられ，それぞれの層準の上位には土壌形成後に堆積した砂を主とする流路充填堆積物が載る．本帯下半以下の堆積物は，流路部分では侵食されており，流路内には，本帯上部に相当する堆積物が分布する．

本帯からはおもに古墳時代前期（布留式期）の土器片が出土した．弥生時代後期の土器片もわずかにまじって出土した（図2.23）．これらのほとんどは本帯下部（図2.6，CS-e, 11層）からのものである．遺構は検出されなかった．

EZ5（弥生時代後期）

本帯は北トレンチではEZ4の下位で，古墳時代前期の土器が出土しない，T.P.13.9～14.2m（図2.6，CS-e, 12層）の垂直範囲に相当する．出土土器は，弥生時代後期後半のもので（図2.24），ほとんどは逆級化成層する砂礫層の上部でみつかった（図2.25）．この砂礫層は，南トレンチではやや細粒で薄く（図2.7，CS-g, 19層），遺物が出土しなかったため，本帯上端の層準は確定しにくい．前節で述べたように側方の層相変化を考慮すると，少なくとも砂層とその上位の砂質泥（18層）も本帯に含まれると考えられる．両トレンチとも遺構は検出されなかった．

埋没流路充填堆積物の相対年代

EZ1から5の相対年代から，北トレンチ北西隅と南トレンチ南西隅で検出された埋没流路の継続年代がわかる．北トレンチの北西隅断面（CS-a,b）では，

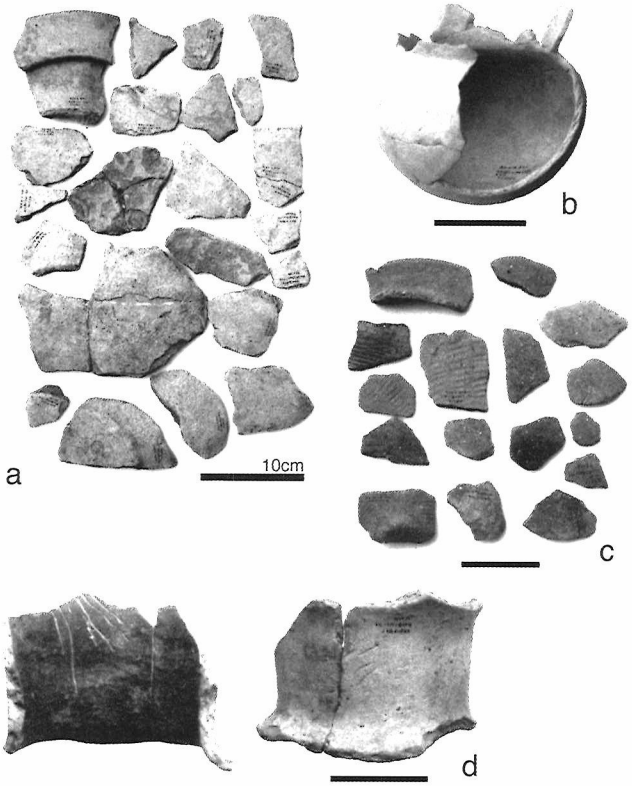


図2.23　北トレンチ，EZ4（CS-e，7～11層）から出土した古墳時代前期（布留式期）の土器片．スケールバーはa以外5cm．a: 土師器，大型甕の口頸部，底部の破片．同一個体．b: 土師器，小型丸底壷．c: 弥生土器．甕胴部，底部破片．壷胴部，底部破片．d: 弥生土器．壷頸部破片．

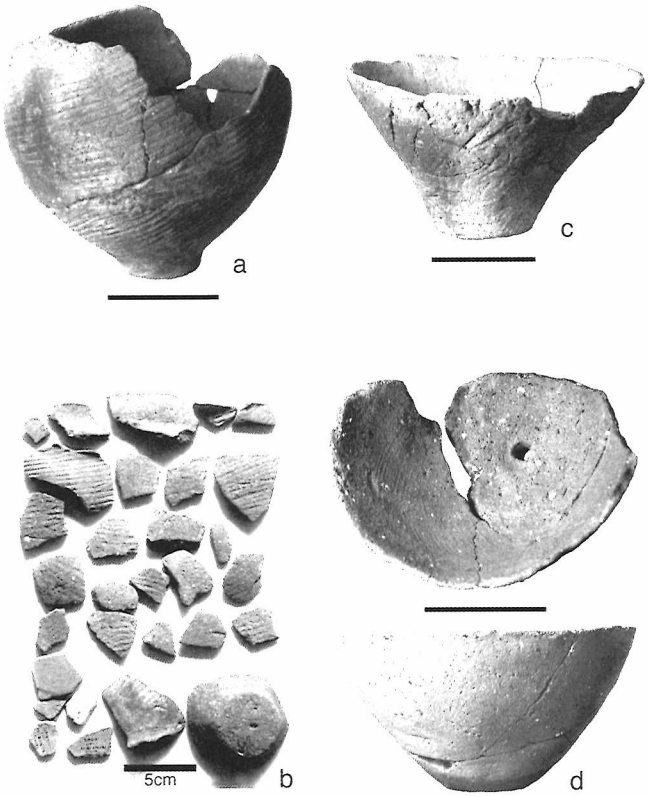


図2.24　北トレンチ，EZ5（CS-e，12層）から出土した弥生時代後期後半の土器．スケールバーはすべて5cm．a: 甕．b: 甕の口縁部，胴部，底部の破片．同一個体．c: 鉢．d: 底部に穿孔された鉢．

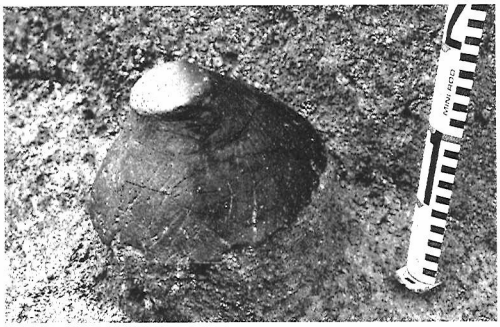


図2.25　北トレンチ，EZ5（CS-e，12層）の弥生土器（図24-c）の出土状況．スケールの文字の高さ5cm．

EZ5を構成する砂礫層（12層相当層）が下位の泥層（13層）を切って掘削底より下位のくぼみ（流路）を充填していることから，弥生時代後半にはすでに，この調査区外北西近傍に流路が形成されていたと考えられる．この流路と同時期の流路は南トレンチにはない．流路はその後，下刻と充填が2回繰り返されているが，充填はEZ3の最上部で完了しており，その相対年代は7～8世紀と考えられる．したがって，北トレンチの埋没流路は5百数十年断続的に機能したことになる．

2回の下刻・充填は南トレンチの埋没流路（CS-g,f）でもおおむね一致している．この流路形成によって侵食された最上部の堆積層，あるいは流路充填堆積物の下底は，EZ4の中位で，古墳時代前期（布留式期）にあたる．充填の終了は同じく7～8世紀なので，この流路は長く見積もって3百数十年間，断続的に機能したと考えられる．

2.6　不撹乱試料の観察

堆積物はそれらの堆積面や侵食面の上位が地表や水底となることによって，上方から物理・化学的および人間活動を含む生物的な，多様な営力の影響をこうむる．また，堆積物内部では，それ自体の組成や水分条件によって変化がおこる．必ずしもすべてではないが，その多くは土壌として堆積物中に形をとどめる．その理解は，遺跡形成過程の推測に有効な情報を提供する（たとえばCourty, 2001）．現地では堆積物の不撹乱試料を採取し，室内でそれらの研磨ブロックと薄片を肉眼と実体顕微鏡で観察した．不撹乱試料の採取位置を図2.7の堆積層断面図に，各試料の採取層準を図2.26に示す．

試料の処理と観察方法

採取した試料は，垂直断面の上下・左右15 × 15cm，厚さ約10cmのブロッ

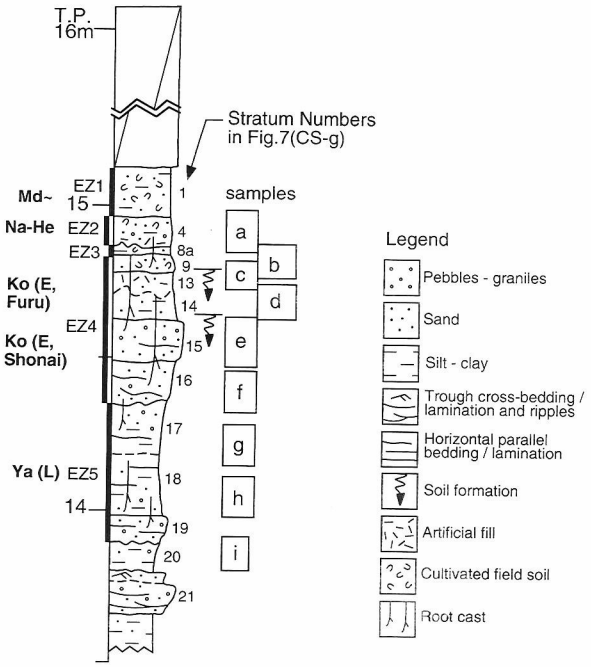


図2.26　南トレンチ南辺の柱状断面図とブロック試料採取層準．柱状断面の位置は図7参照．柱状図は，おもに現地での観察にもとづくため，粒度の表現がいくぶん細粒ぎみになっている．

クで，室内ではそれらを厚さ1cm以下の板に削り，風乾した．その後キシレンで希釈したカナダバルサム中で煮沸してカナダバルサム含浸し，乾燥・固化の後，垂直断面を研磨した．研磨面の観察後，さらに細部を調べるため，試料を分割して薄片を作成した．研磨ブロックの画像記録はフラットベッドスキャナで，薄片はマイクロレンズをつけたディジタルカメラでおこなった．

観察結果の記載は，土壌微細形態の規範的な記載方法（たとえばBullock 他，1989; FitzPatrick, 1993）や，古土壌に関する概説（たとえばRetallack, 2001など）を参考におこなったが，不備はご容赦いただきたい．構成物質の粒径の表記は，土壌学の慣例に従わず，他の節と同様にWentworthの粒径区分によった．

観察結果

(1) 試料aは南トレンチ南辺の堆積層1, 4, 8a層を含む．a-1に示す試料全体の画像には，上方からの根の発達によってひきずられた砂礫と根の痕跡に沿って沈着した酸化鉄がともに右下がりに斜交する平行な列をなす．これらのほとんどは末端の支根によるものと思われるが，ほぼ垂直に近い方向にのびる幅1～2cmの暗色部分には，より太い根の痕跡がみとめられる．現地の断面では幅4～8cmの根の痕跡もみられ，木本の根の痕と考えられる．盛土堆積以前のもっとも新しい土壌層位のB層に相当する．

a-2は試料a上部の1層の構造を示す．粗粒砂から極粗粒砂の粒子が網目状に分岐して連なっている．それらはほとんどの部分で，幅数mm～1mm前後の根の痕跡をともなう．この中には上述した，もっとも新しい根の痕跡も含まれる．粗粒な砂粒で囲まれた，より細粒な砂粒と泥からなる比較的均質な部分は長径1～1.5cmの円～亜円状のペッドをなす．畑耕作地の遺構をともなう作土の観察例（別所・松田，1997など）を参照し，これらは埋没畑地作土のものと判断する．同様の構造は4層，8a層の層界にあたるa-3の画像にもみられるが，いくらか破壊された印象をうける．現地の観察でも，この層界は上下5cmまでの起伏に富み，人為的に擾乱された形跡がある．耕作土を材料とする盛土と考えられる．明瞭な粘土皮膜はみられない．柱穴，ピットなどの形成層準の堆積物は，残存した8a層の上位で，4層堆積時（あるいは堆積前）に失われた可能性が高い．

試料aの最下部と試料bの最上部はほぼ同一層準で，a-4とb-2の画像には，ともに輪郭が不明瞭なペッドがみとめられる．b-2の中位下寄りにみられる黒い斑点状の領域は主として，細粒砂．極細粒砂を含む粘土で充填された，おもに管状の根の孔隙と不整形なチャンバー状の孔隙で，とくにこの層準に多い．孔隙内には部分的に粘土皮膜がみられた．これらの特徴は畑地作土層最下部から直下に生じるといわれ（Courty *et al.*, 1989），上位層の畑地耕作にともなって集積したと考えられる。

(2) 9層は上位層に比べて暗色を呈し，腐植をふくむ泥が砂の間隙を充填し

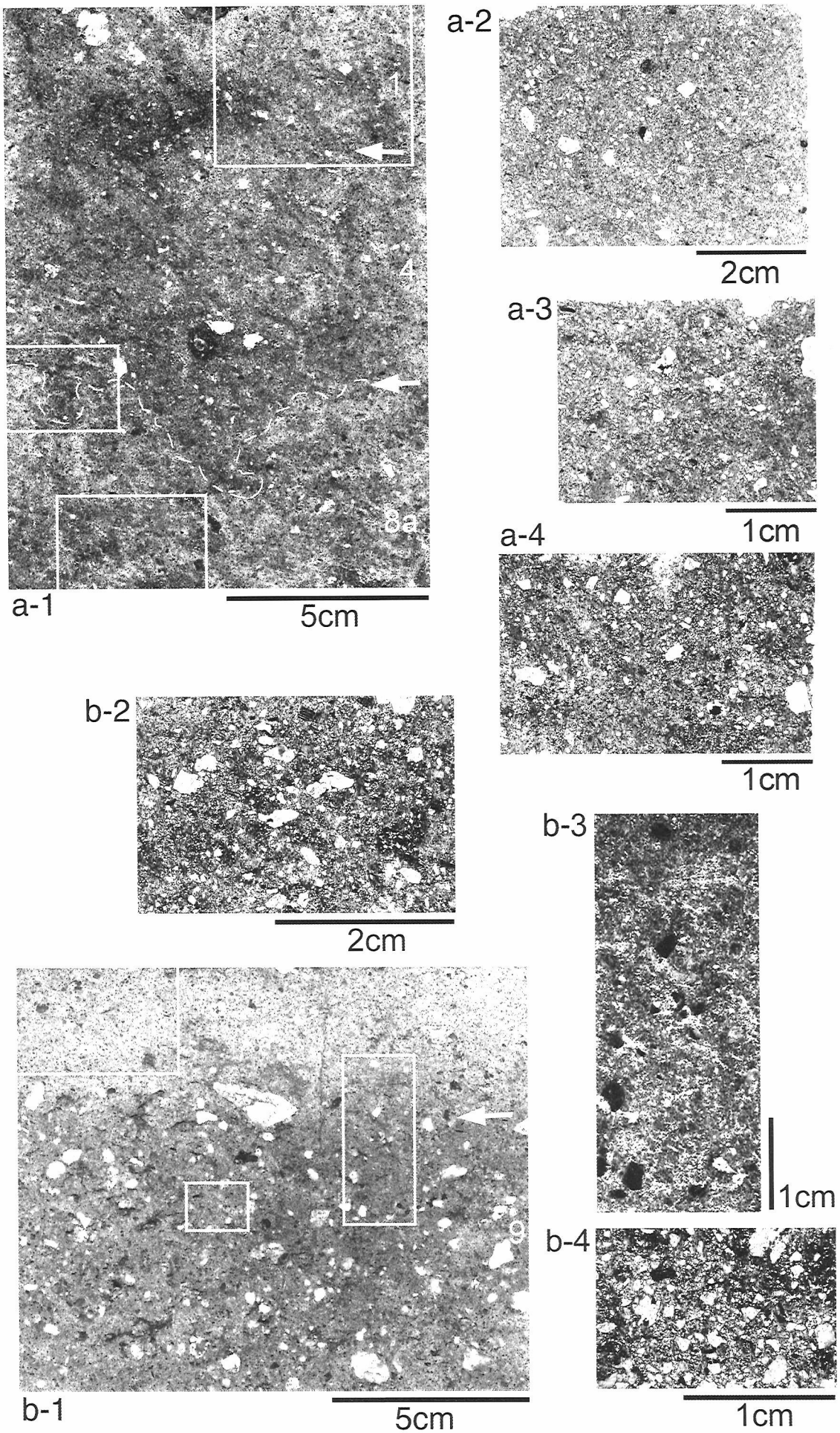


図2.27　不攪乱試料a,bの研磨面と薄片の画像．a-1, b-1: ブロックの研磨面．画像右端の番号は南トレンチCS-gの層番号．矢印は層界のおよその位置．白い破線は屈曲した層界を示す．図2.28～2.30も同様．スキャナ画像．赤色の明度を下げる処理を施した．a-2, 4, b-2, 4: 薄片．透過光による撮影．b-3: 白枠内の画像の階調を反転し，赤色部分をハイライトにした．

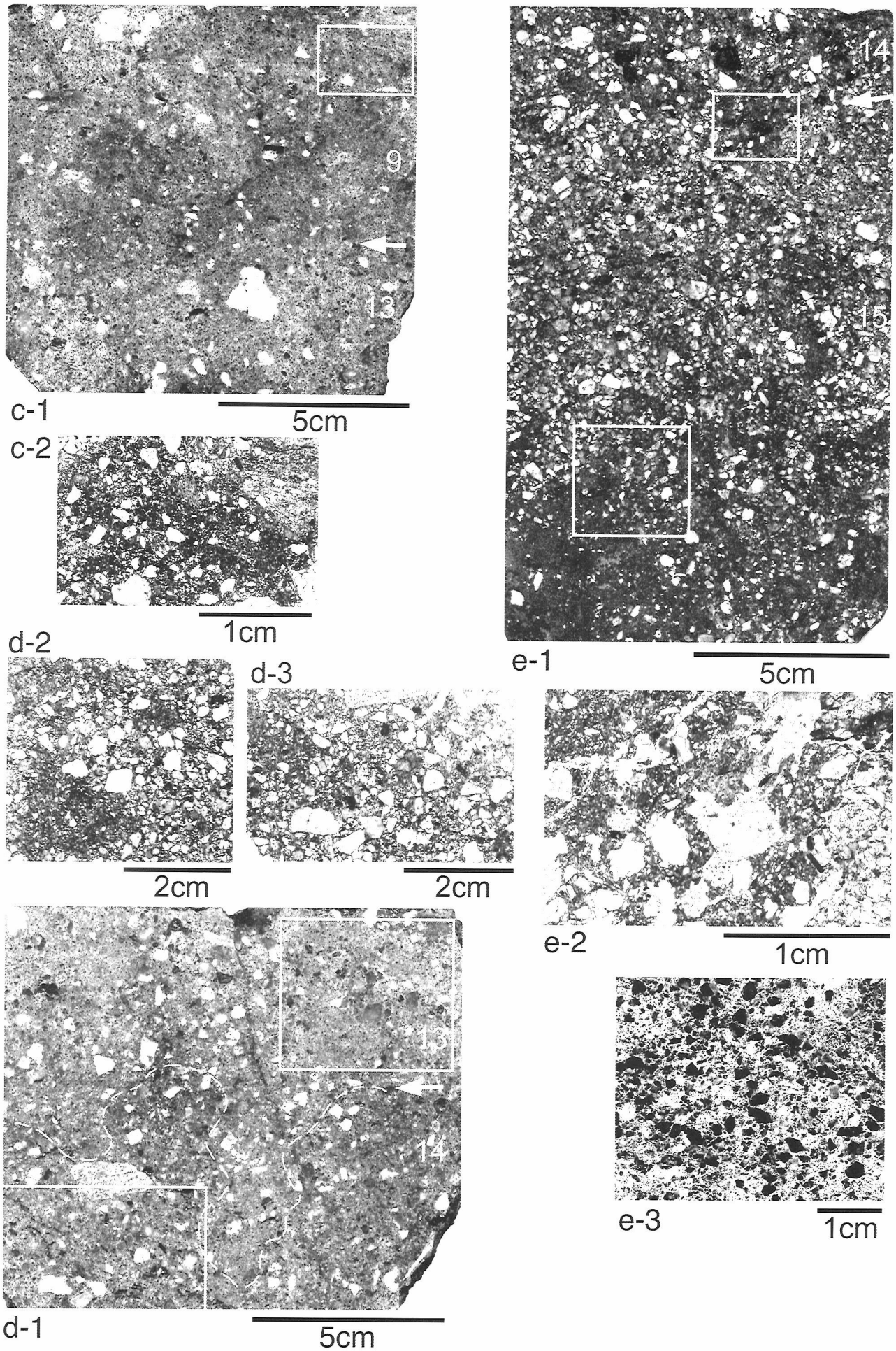


図 2.28　不攪乱試料 c,d,e の研磨面と薄片の画像．c-1, d-1, e-1: ブロックの研磨面．スキャナ画像．赤色の明度を下げる処理を施した．c-2, d-2, 3, e-2: 薄片．透過光による撮影．e-3: 白枠内の画像の階調を反転し，赤色部分をハイライトにした．

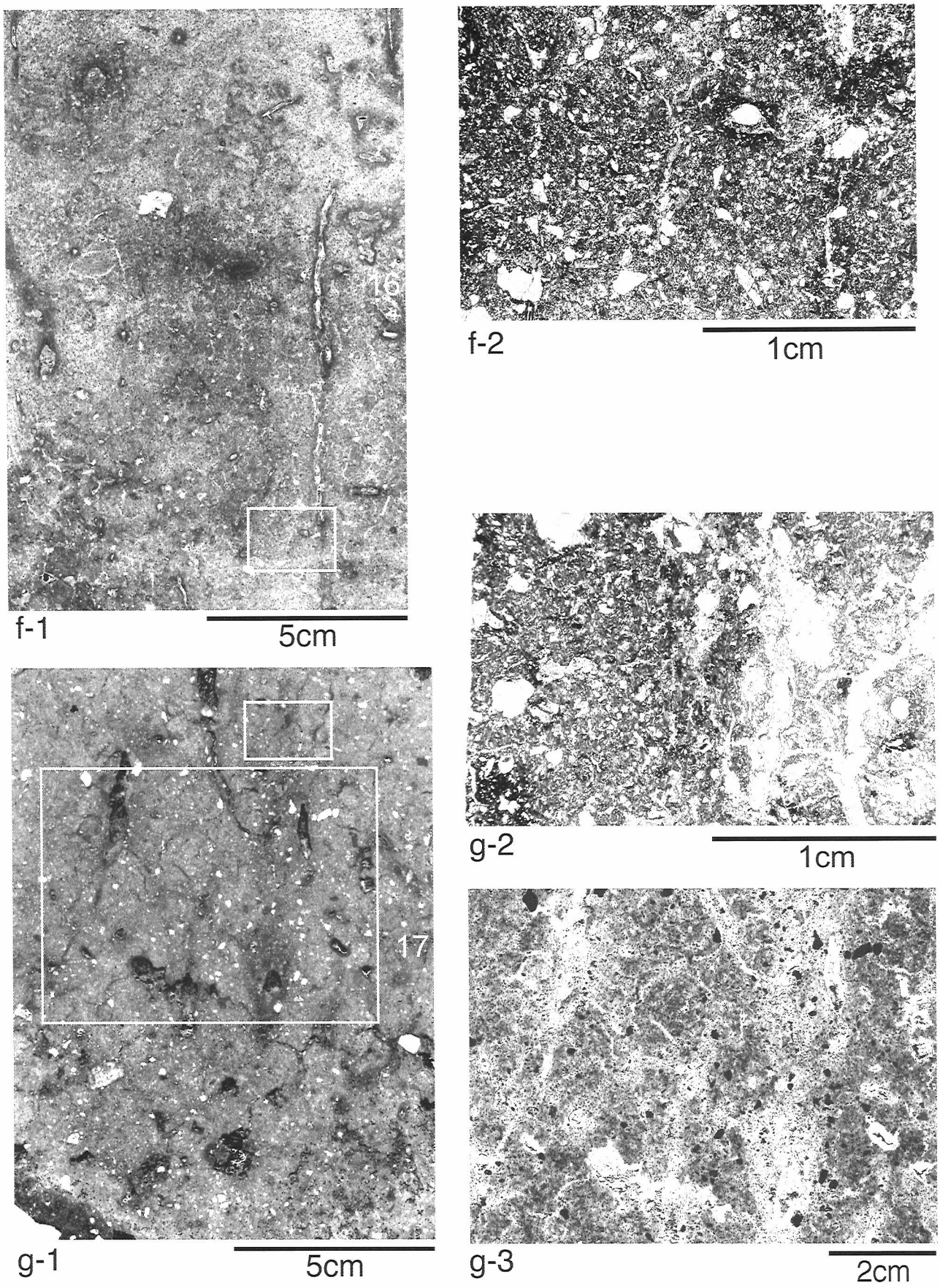


図 2.29　不攪乱試料 f,g の研磨面と薄片の画像．f-1, g-1: ブロックの研磨面．スキャナ画像．赤色の明度を下げる処理を施した．f-2, g-2: 薄片．透過光による撮影．g-3: 白枠内の画像の階調を反転し，赤色部分をハイライトにした．

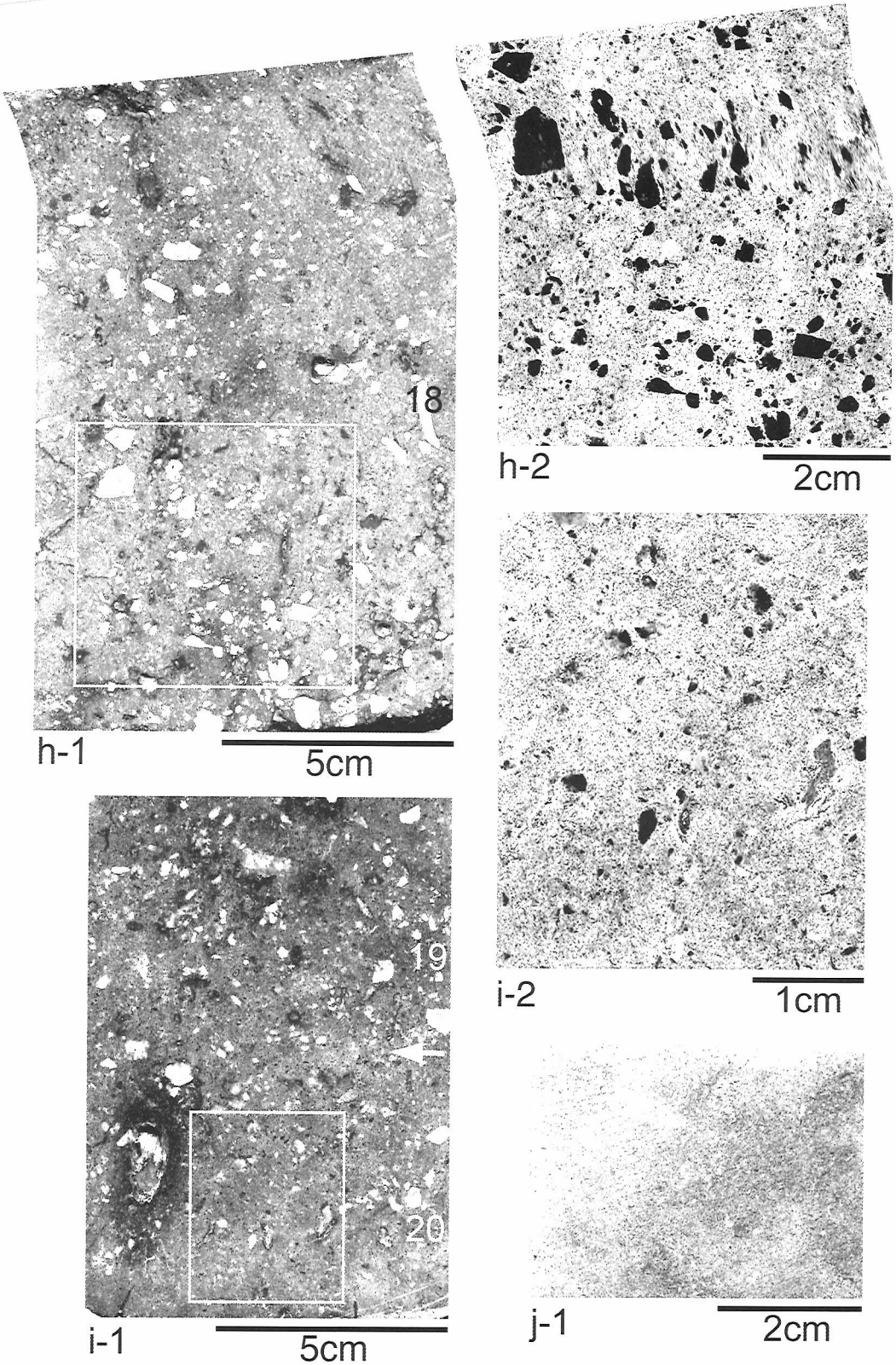


図 2.29　不攪乱試料 h, i, j の研磨面と薄片の画像．h-1, i-1: ブロックの研磨面．スキャナ画像．赤色の明度を下げる処理を施した．h-2, i-2: 白枠内の画像の階調を反転し，赤色部分をハイライトにした．j-1: 薄片．透過光による撮影．

ている．土壌層位のＢ層下部に相当する．上面の層界は明瞭である．図 27,b-1でみられる粗粒砂～細粒の中礫の分布パターンは，中粒砂以細の砂と泥の均質に見える長径１～2cm の領域を取り囲むように分布するが，上方からの根の発達にひきずられているところもある．不整形なペッドが多い．画像のもっとも暗色部分は内側に凸な輪郭の集合からなる不整形な孔隙で，部分的には管状の根の痕跡に連続している．砂礫の分布パターンとは整合的な部分とそうで

ない部分があり，初生のペッドに土壌形成によって新たな構造が付加されつつあったと考えられる．孔隙の壁から外側には，1mm以下の厚みで酸化鉄が沈着した部分がある．

この酸化鉄の部分がもっとも明るくなるように処理した画像が，b-3で，線状に連続して（亀裂状に）分布する微細な孔隙の様子を見ることができる．縦長画面の右端から約5mmのところには，ほぼ垂直方向にのびた根の痕跡がかすかにみられる．9層上面付近の数mmの垂直範囲には，水平方向にのびる微細な平行葉理状のパターンがみとめられ，それより下方はななめ方向にのびる孔隙が漸次増し，孔隙の領域も増す．ペッドは上部ほど細かく，亜円に近い粒状をなすものも見られる．一方下部では，より角張ったペッドが多く，長径1cm前後のペッドは，数mm以下の大きさの副次的なペッドの集合からなる．これらの分布パターンは不規則で，上述したように初生のペッドが破壊された偽礫の集合と考えられる．ペッド間にもb-4に示すような，水平方向にのびる構造がみられる．

以上のことから本層の堆積物は，おそらく畑地の作土として利用された（あるいは何らかの擾乱の）後，放置され土壌化するとともに，踏みつけられたと考えられる．土壌層位のA～B上部層は，8a層堆積時に削平され，本層準はB層下部に相当すると思われる．したがって，この削平から免れた部分は土壌形成後，擾乱されていない．

(3) 試料c上部は9層で，試料bの下部とほぼ重複する．9層と13層の層界はやや不明瞭だが，9層中の有機物に富む暗色領域の分布が13層上面付近で漸次とぎれる．土壌層位のBC層とみなせる．試料c下部と試料dの上部はほぼ同じ層準である．13層は中粒砂以細の砂と泥が卓越し，細礫と粗粒な砂がその中にまだらに分布する．d-1では，前者の細粒物質が，長径2～3cmの比較的大きなペッドを構成しているようにみえる．これより小さいスケールでは，ペッドはほとんどみとめられず，上方からの根の痕跡や，動物の擾乱による構造が顕著である．d-2の左下には，細粒物質で充填されたミミズの這い痕がみられる．また列をなして分布する粗粒砂から中粒砂は，根の発達によって引きずられた痕跡である．

同試料でみる13，14層の層界はひじょうに屈曲しており，上述した13層のペッド（偽礫）の散乱によるものと考えられる．すなわち，13層は14層上面の堆積物に影響をあたえる深さで擾乱され，おそらく平坦な上面をなして，その場で再堆積したものと推測される．

(4) 上述の偽礫は，d-1の14層においてもみられる．本層の堆積物は，腐植を含む泥に富み，ほとんどの領域で生物擾乱の痕跡がみとめられる．また，孔隙も多い．d-3画像中でもっとも黒く見える長径1mm以下の角塊状の粒は，炭の細片である．調査地の累重中ではもっとも暗色を呈する．これらのことから，本層の土壌がかなり地表付近で生じており，土壌層位のA層下部ないしAB層に相当すると考えられる．試料eの最上部にみられる14層では，ほぼ全体に生物擾乱がみられるが，e-2に示すように，上位層に比べてより高密度に根の痕跡が分布し，孔隙も多い．人為的な擾乱の痕跡はみとめられない．

以上のことから，13層堆積以前の14層の上位には，侵食によって消失した，O, A 層が想定され，比較的長期間にわたって植生が発達したと考えられる．炭片がまじるが，わずかであり，直接的に人間活動を示さない．

(5) 試料 e の 15 層はおおむね逆級化成層をなす泥まじり礫質砂層である．e-1では，上位層準からの根の痕跡や，ミミズの這い痕が暗色部分を中心にみられる．本層は土壌層位のAB層に相当する．また，画面の中位やや上寄りには，堆積時の構造と思われる，水平方向の葉理がわずかに残存する．

画面の下部1/4より下方では，中粒砂以細の砂を主とする16層堆積物に漸移しているが酸化鉄が集積しているので，そうとは見えない．酸化鉄は，e-3にみられるように，泥質堆積物のほとんどの部分に沈着している．試料範囲の直下，16 層の最上部で，明瞭な分布の境界があり，年代は不明だが，過去の地下水面を示している．このことと関係すると思われるが，15 層より下位では，根の痕跡などの孔隙にはほとんど粘土が充填されていない．

(6) 試料 f は 16 層，試料 g は 17 層の堆積物である．前者は泥まじりの中粒砂以細の砂からなり，後者はわずかな細礫と，おもに粗粒砂までの砂のまじるシルト質粘土で，堆積物の粒度は異なるが，土壌の構造はほぼ同じである．g-1と同様，幅数 mm から 1mm 弱の根の痕跡が全体にみとめられる．ただし両試料では，根の痕の形や分布パターンが若干異なる．試料 f では，水平方向と垂直方向にのびる根の痕が多く，試料gでは斜めにのびて分岐する根の痕が多い．同じ根系の，異なる堆積物に対する応答とも，累重中に異なる植生が発達したとも判断しにくい．この2試料の間の層準で，調査地北側の流路が下刻されていたこととも関係するかもしれない．

g-1では，これらは暗色の網目パターンをなしているのがわかる．孔隙の壁面が平行する（あるいは両側の壁面が接合する）部分ばかりではなく，チャンバー状の部分も多い．管状の孔隙を酸化鉄が暈状にとりまいて分布している．f-1 の画像では不明瞭だが，おもに根の孔隙に境された角～亜角状の，長径 3～1cm 弱のペッドが発達している．g-3 では酸化鉄の領域をハイライトにして，その分布を確かめた．f-2 の画像中央に長径 1cm たらずのペッドが 2 つ並んでみえる．周囲にも同様なペッドの一部がみられる．これと同じスケールで，g-2 では根の孔隙がやや込み入った部分にある，比較的小さいペッドを示している．周囲の極暗色～黒色の部分は酸化鉄である．これらのペッドの内部にもさらに微細な管状，チャンバー状の孔隙があり，長径数 m 以下のいくつかのユニットに区分される．

(7) 18～20 層を含む試料 h, i では，上述した根の痕跡やペッドの発達が下方に向かって漸次減衰することがわかる．h-2, i-2 はともに酸化鉄の部分をハイライトにした画像である．これらの堆積後の変形とともに，わずかながら堆積構造もみられる．たとえば h-1 の上部では，細礫，極粗粒砂の粒子が水平方向に並び葉理をなす．それらの一部は，根の侵入によって歪んでいる．i-1 にも砂粒子が葉理を示唆する部分がわずかにある．18～20 層は，土壌層位の B 層下部から BC 層に相当する．

(8) 試料 j は 21 層の下位のわずかに砂質のシルト質粘土から採取した．堆

積時の構造は塊状である．画面の右上には，葉理をなす偽礫がみとめられる．底生動物の這い痕と考えられる屈曲した帯状の領域がみられ，幅0.2mm以下の根の痕跡が，それらを切ってのびている．根の痕跡は上位層準の草本植生の発達のよるものと考えられる．長さ0.3mm以下の短い繊維状の黒い粒は，未分解の植物片である．狭い範囲の観察だが，乾痕はみあたらない．これらのことから，本層堆積物は，植生のとぼしい水底で堆積し，同条件が継続したと考えられる．本層は，土壌層位のC層に相当する．

観察結果のまとめ

不撹乱試料の観察結果から，前節で述べたEZの相対年代と併せて，推測されることがらを以下にまとめる．

(1) 中世以後（EZ1），調査地には耕作地が展開した．試料の観察によって，その作土には耕作以外の営力による擾乱がみとめられないことから，その上位には，堆積物が載り，それを作土材料としてあらたに耕作地が維持されたと考えられる．

(2) 古代から中世にかけて（EZ2）は，畑地作土の構造が，整地などの人為的な擾乱によって破壊されている．このことから4層の狭い垂直範囲の中で，堆積物の移動をともなう耕作地組織の改変などがあったと考えられる．4層中での中世遺物の分布にもよるが，1層の中世の耕作地の造成・維持にともなって擾乱された可能性が高い．

(3) 古墳時代後期から古代前半（EZ3）でも，上位の層準と同じく作土が擾乱されたと思われる．建物が造られた地表面は上位層の堆積以前に失われた可能性が高い．

(4) 9層が堆積した古墳時代前期から8a層堆積期までの，古墳時代中期を中心とする時期に，土壌形成をともなう堆積の休止期間があったと考えられる．土壌層位の最上部の堆積物は削平されているが，（おそらくそれ以前に）踏み固められているとともに，下位層準に深く土壌層位を形成していないことから，形成期間は比較的短かく，掘り返しtillageをしない草地などの人為的な植生が発達したと考えられる．踏み固めと土壌化の同時期性はさらに詳細に確かめるべきだが，この状況は牧場の土壌にみられるようである（Courty *et al.*, 1989）．この土壌化に先立つ古墳時代前半（前期後半～中期初頭？）には，9層を作土とする畑地であった可能性が高い．

(5) 遺構として耕作痕跡が検出されたことからも，9層の土壌構造は，おそらく古墳時代後期以後に，その上位層も含めて耕作土として擾乱されていたと考えられる．

(6) 古墳時代前期の土器片を含むEZ4の上部（おそらく布留式期），13,14層の層界からは，2つのイベントが読みとれる．14層の上位に想定される古墳時代前期後半までに土壌化した堆積物が削られ，そのいくらかは流路に落とし込まれたことと，13層の擾乱にともなって削平された14層の上面付近で偽礫が再堆積，あるいは変形したこと，である．これらが同時に起こる営力・機構を思いつかないので，前後関係にあると判断する．

(7) 14層上部の土壌形成は，弥生時代後期のEZ5の層準までおよび，一連

の土壌層位を形成している．ただし，EZ4と5の境界にあたる16, 17層の層界の上下で，試料fとgにみられるように，根の痕のパターンが異なることは注意したい．

14層の直上から形成された土壌層位中，試料gにみられるような顕著なペッドの発達は，B層の乾湿のくりかえしで生じるといわれ（Retallack, 2001），乾燥状態での低い地下水面は，下刻された流路への地下水の流出に対応する現象と考えられる．

(8) EZ4の上部では，遺物堆積後の時間経過を見積もらなければ堆積層の相対年代を決定できないのに対して，同EZ下部とEZ5以下で産出した土器片と堆積物の年代は，上方からの土壌形成にともなう変形はあるものの，さほど隔たっていないと判断される．

2.7　楽音寺遺跡周辺の地形

本節では調査地近傍の地形の特徴をやや広範囲な地形条件のなかで，とくに地形区分と推測される表層地質の観点から眺望する（図2.31）．

本遺跡は、東方の生駒山地と西方の沖積低地との間に発達した沖積扇状地緩斜面，標高15～20mにある．この沖積扇状地を構成する堆積物は，おもに箕後川によって供給されたものである．箕後川（横小路谷）は生駒山地の標高約450mの主稜線から，標高約100mの谷口までの間にひろがる約0.9km^{2}の集水域をもつ．ちなみに，標高642mの生駒山直下から流下する辻子谷（音川）の集水域は，この山地西斜面では最大で，約1.6km^{2}である．山地のほとんどは，黒雲母花コウ岩の岩体からなり，ごく一部に閃緑岩質花コウ岩と斑レイ岩体が分布する．

山脚と沖積扇状地面の最上部には，生駒山地西縁の断層系の一部なす断層が少なくとも2本みとめられる．その内，山脚の標高150～100mを走るものは，約3kmにわたって上盤に向かって凸な形をなし，その南端部は本遺跡南東部の山脚にある．同様な凸型の断層が八尾市楽音寺から恩智にかけての山脚にのびている．両者の接合部分は，平野側に突き出た形をなし，ここに更新統中・下部に相当する大阪層群が，標高50～70mの残丘状に分布する（現在は多くの部分が人工改変で削平された）．図2.31では，とりあえずこれらを沖積扇状地高位面として区分した．ただし，踏査ではこれが扇状地堆積物かどうかの確認を怠った．高位面構成層は山地側ではほとんど侵食され，平野側では沈降して地下数10mに伏在すると考えられる．

山地斜面の基部，標高100～60mには，幅200m，頂部から堆積縁辺までの水平距離が300m以下の急斜面をなす沖積錐が，集水域の小さい山地の谷から発達している．山脚の一部には，地滑りや表土の匍行で生じたと考えられる崩積性堆積地形の斜面がみられる．

以上の地形面が分布しない領域では，標高150～100mの谷口から，標高8～13mの沖積低地面東縁までの，水平距離で1～1.5kmの間に，より新しい複合扇状地のロウブが多数分布する．これらを高度，開析の程度，考古遺物から推測される表層地質の形成年代などによって，上位面，中位面，下位面に区

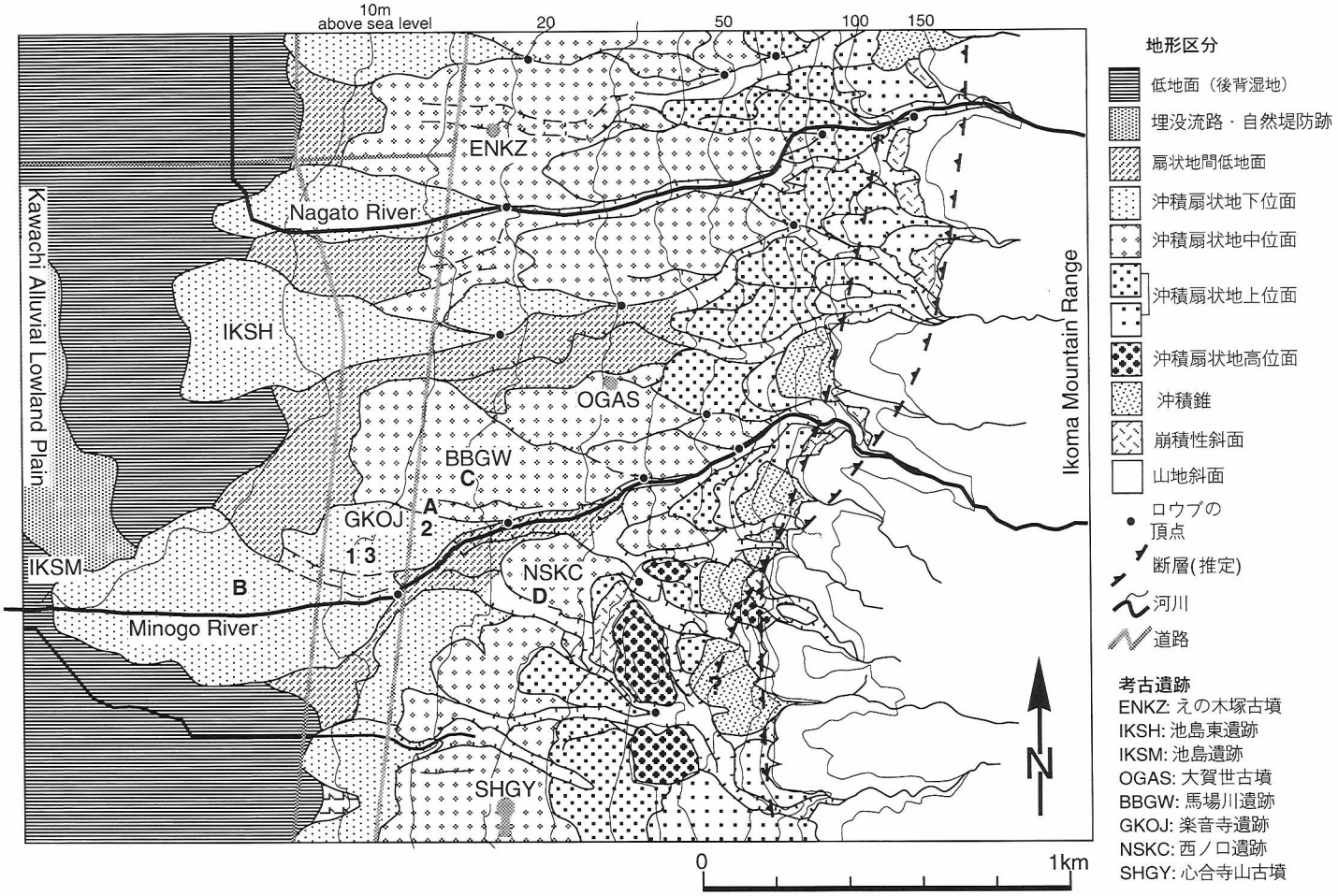


図2.31　楽音寺遺跡とその周辺の地形分類図．昭和36年の空中写真の判読による．等高線は2万5千分の1地形図による．図中の番号1～3は楽音寺遺跡各次調査地の位置．Aは永田（2000）の楽音寺，Bは池崎（1999）の池島，Cは才原（2001）の馬場川，Dは下村・菅原（1987）による西ノ口，各遺跡調査地の位置．

分した．上位面の表層地質は，更新統上部から最上部に相当する，最終間氷期から約1万年前の堆積層からなると予想されるが，確実ではない．上位面の上部には，より新しい時代にその一部を覆ったロウブが含まれると思われる．

中位面を構成するロウブの頂点は標高80～60mにある．中位面の地表下2～4m以浅は完新統からなり，大部分は縄文時代の数千年間に形成されたと考えられる．ただし，弥生時代以後も堆積作用はさかんで，ロウブの形成過程で生じた流路のほとんどは埋没しており，地表面でその痕跡は把握しにくい．弥生時代以後の堆積層の厚さは，古墳時代以後の耕作地開発にともなう切土・盛土によって観察される層厚は所によって異なるが，馬場川遺跡（図中のC地点，才原，2001），西の口遺跡（D地点，下村・菅原，1987）の調査結果などから，平均的には60～70cmと推測される．両地点ともにその最下部は弥生時代後期の堆積層からなり，直下は縄文時代晩期の堆積層である．本遺跡周辺での中位面の下辺は標高10～20mである．

箕後川，長門川の谷口付近の扇状地面は深く開析されており，中位面下部の高度まで流路沿いに低い崖がみとめられる．また，山脚から標高約30mの中位面の中程までの斜面には開析谷が多数分布する．開析谷は，集水域のごく小さい山地斜面の小谷や，山脚の斜面に向かっても発達している．これらは山脚付近の扇状地面の上昇にともなう局地的な基準面の低下，晩氷期以後の挿話的な海水準の低下，あるいは山地からの急激な流出によって形成されたと考えられる．最終氷期の比較的大規模な開析谷は埋没しており，地表面で識別するのは困難である．現地表面でみられる開析谷底はより新しい堆積物でなかば充

填され，平坦面をなすところが多い．いくつかの開析谷は，中位面下半から下位面にもみとめられるが，ほとんど埋没し不明瞭である．複数の段丘をともなう開析谷はごくまれである．

低位面は，標高20～30mの中位面下部，あるいはそれと同高度の扇状地間低地から低所に向かって形成されたロウブ群からなり，その先端は沖積低地に突出している．生駒山地西麓を流下する河川の多くは扇状地帯下辺にこのようなロウブをともなっているが，箕後川では比較的大きい．この形成時期は，すでに述べた堆積層の累重とそれにともなう出土遺物の年代から弥生時代後期以後と考えられる．この先端付近から，沖積低地面の緩やかな北向きの傾斜に従ってのびた流路があったことを示す自然堤防状の高まりがみとめられる．ただし，図示していないが，この高まりは下流側へはあまりのびず，終端部分の輪郭は不明瞭である．

以上の扇状地斜面のほかに，明瞭なロウブがみとめられず，いくつかのロウブ群の間の低所に分布する平坦な緩傾斜面を扇状地間低地とした．流路とその近傍以外は，泥質堆積物が卓越すると思われる．現在の河川沿いの，おもに中位面に沿って低く段丘化している．箕後川左岸と，右岸側に分布するロウブ群の北側には，こうした扇状地間低地が，山地側に向かって比較的深くはいり込んでいる．中位面下部沿いの古い扇状地間低地面は上述した低位面を構成する堆積物に覆われているが，扇状地間低地の沖積低地に隣接する部分は低位面と並行して発達したと考えられる．

2.8　楽音寺遺跡北部の堆積層の累重と地形発達

本節では，箕後川左岸の扇状地低位面のロウブの形成過程を堆積物の累重の観点から検討する．本遺跡第1～3次調査地の柱状断面図を図2.32に示す．記載された堆積層の時代はそれぞれの出土遺物の相対年代による．

いずれの調査地でもほぼ掘削底以上数10cmまでの，弥生時代中期から後期の層準には，砂質泥層がみられる．葉理はほとんど見えない．ところによって細粒の中礫以細の砂礫層が挟まれる．明瞭な層界がなく，漸移的に粗粒化および細粒化する部分もある．有機物に富み，植物遺体はほとんど分解している．泥層はシルトを主とするが，上流側の調査地ほど砂がちであった．また，下流側ほど植物片に富む．以上のような層相から，すでに述べたが，流路からの砂礫を主とする粗粒な氾濫堆積物が，供給されにくく，間欠的であれ，比較的継続的に滞水する低平な堆積の場であったと推測される．微地形の分布から推測して，3つの調査地周辺は，扇状地間低地から，平野側の低地への漸移地帯で，現在の地表にみられるロウブは発達していなかったと考えられる．第1次調査地と第2次調査地の砂質泥層上面の高度差は，183mの距離で約3.5mあるが（構造運動を考慮すればこの勾配はより小さい），砂州の発達や局地的な氾濫堆積は地形面に緩やかな起伏を与え，滞水域をつくりだす．このような条件の扇状地間低地は図2.31に示したように，箕後川沿いの標高40mを越える場所まで分布する．滞水域が継続する要因の一つとして，低地までの地表水および地下水の導水勾配が小さいことがあげられる．それは，河内湖の湖水準が相対的

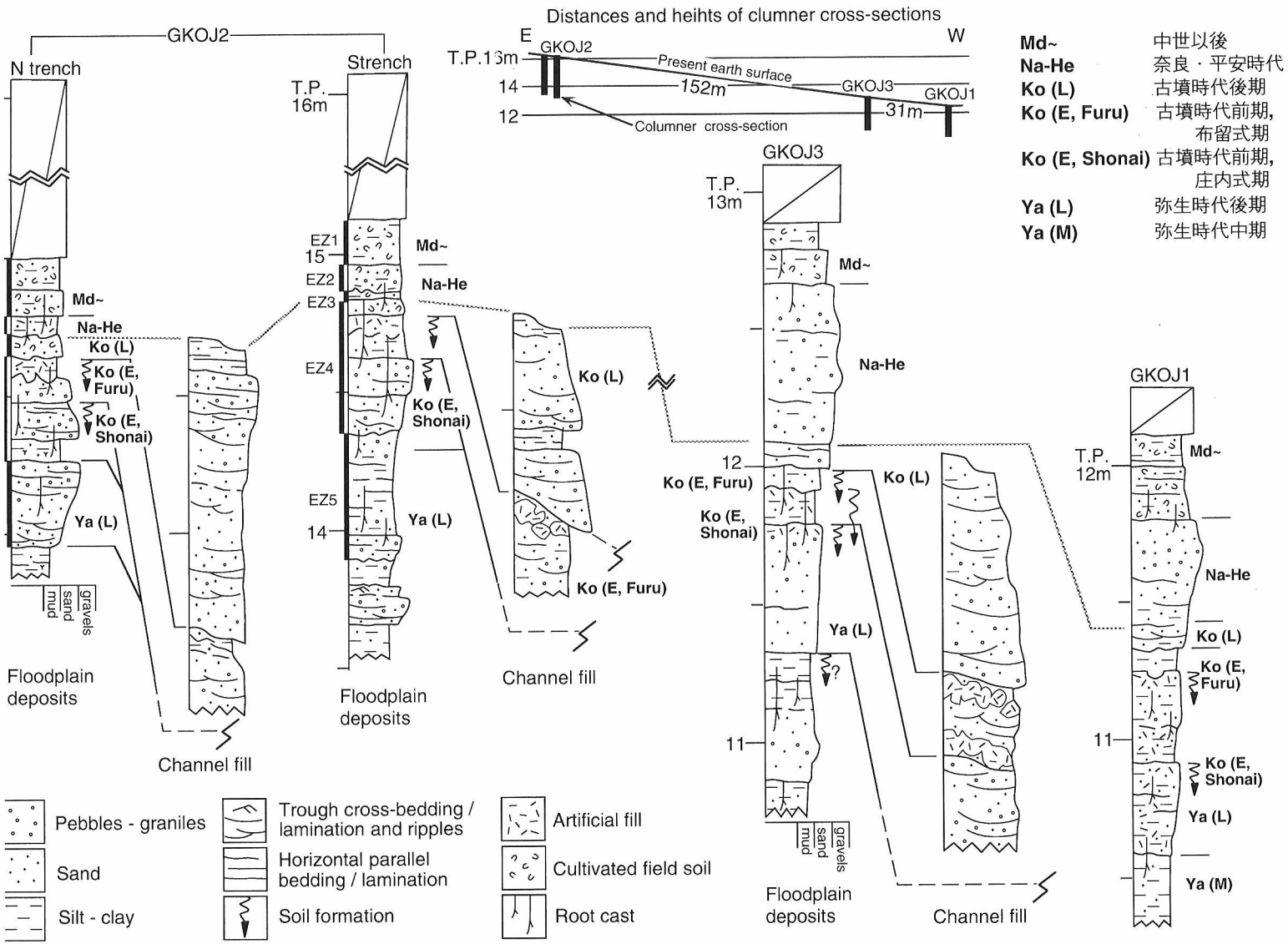


図2.32　楽音寺遺跡第1～3次発掘調査地の地層対比を示す柱状断面図．破線は古墳時代後期堆積物の上端をつないでいる．実線は，各調査地における土壌化層準と下刻された流路底をつないでいる．

に高く，旧大和川分流路の氾濫原堆積物の累重が盛んであったことを示唆する．

この上位の弥生時代後期から古墳時代前期（庄内式ないし布留式の時期）までの累重は，氾濫原（流路の外）では数10cmの厚みがあり，砂礫まじりの泥層と砂礫層が交替して堆積している．砂礫層には部分的にトラフ型斜交葉理や平行葉理がみられるが，泥がちな堆積物とともに，土壌形成にともなう擾乱がいちじるしい．おおむね上方粗粒化する傾向があるとともに，逆級化成層をなす単層もみられる．総じて下流側ほど堆積物は細かい印象がある．

流路の下刻の深さは2mを越えると思われる．第2次調査地では，流路の下刻とその充填にともなう氾濫原の上昇が3回くりかえされたことがわかったが，下流側の第3次調査地でも，3回くりかえされている．近接地点でありながら，その埋没流路は第1次調査地では検出されていない．同調査地の南側に向かって曲流した可能性が高い．流路充填堆積物は，おもに細粒の中礫以細の砂礫で，部分的に砂質泥層が挟まれるが，実際に検出されていない澪筋付近ではさらに粗粒で，山地が近いことを考慮すれば，巨礫クラスの堆積物を含むであろう．第3次調査地の流路充填堆積物は極粗粒の中礫までを含んでいた．下刻の後の一連の充填は，およそ上方細粒化する累重である．上流・下流での粒度の違いはあまりみとめられない．

各調査地の流路の下刻と充填の時期はほぼ一致しているが，少し詳細にみると，古墳時代後期には第2次調査地の堆積物は下位の堆積物に比べ細粒化しているのに対して，他の2調査地では引き続き粗粒化する．また，流路の充填堆積物の上部は，上方粗粒化し，最上部には放棄流路を示唆するような砂質泥が載る．

第2次調査地，南トレンチの流路と第3次調査地の流路は，支流・本流の関係はあるとしても，連続した澪筋をなしていたと考えられる．北トレンチ北西隣の流路は他の2流路よりいくらか古い時期から活動し始め，充填・放棄される時期はほぼ同じだが，上流側で分岐した別の流路である．さらに，調査地の北側には，空中写真の観察から，ロウブの頂部付近で分岐していたと考えられる埋没流路がみとめられる（図31，A地点）．東大阪市教育委員会がおこなった下水道埋設工事にともなう立会によると，形成・埋没時期はわからないが，とりあえず埋没流路であり，古墳時代から中世までの遺物がみつかったらしい．掘削された堆積物は一部を除き，泥質砂あるいは砂質泥らしい（永田，2000）．これらが流路充填堆積物だとすれば，放棄流路の趣きが強いが，下刻の時期を古墳時代と仮定すれば，この流路も含めて調査地近傍には3本の流路が同時期に存在したことになる．

以上のことから，弥生時代後期から古墳時代後期までに，低地側に開けた扇状地間低地に，箕後川から供給された氾濫原の堆積物が累重し，調査地付近のロウブが発達していったことがわかる．上方粗粒化は，局地的基準面（低地面）に達するまでの流路の延長や、上流区間の前進による河床勾配の増大など関連するであろう．恒常的な河流の有無は確かでないが，流路変更や移動の少ない分流路が発達した様子がうかがわれる．

人間活動は古墳時代前期以来，断続的に活発で，第3次調査地では土壌化した表土を多量に流路に投入し，河川微地形の改変をこころみた跡がみとめられた．この片鱗は第2次調査地の流路内でもみとめられる．また，氾濫原ではおもに耕作地が展開した．第2次調査地の北側の流路が放棄されたと仮定し，次に述べる古代以後の累重や現在の地形から推測して，古墳時代中期には，上述の掃流物質を主とする河川堆積の場は，3調査地の西南西側，現在の箕後川下流，標高10～15mの区間に移動し，新たなロウブを形成していたと考えられる．池島遺跡南東部の図31，B地点では，地表下3.5mから約2mの厚みで累重した砂層の下部にはさまれる土壌化層準から古墳時代中期の土器が出土した（池崎，1999の実測図による）．

なお，B地点から約450m西方の池島遺跡第13次発掘調査地点では，地表下約4～6mに，弥生時代後期から古墳時代前期の砂礫がみとめられ（三輪，1996），流露充填堆積物と考えられる．そのフォーセット葉理は，北方向の古流向を示し，箕後川から流入したものではないと判断される．

古墳時代後期までの流路および氾濫原の堆積物の上位，現代の盛土直下までの累重は，第2次調査地では，20～30cmの厚みの数枚の耕作土層である．いっぽう，第3，1次調査地では，同時期の層準に，層厚40～60cmの泥質砂礫層がみられ，その上に数枚の耕作土層が20～30cmの厚みで載る．泥質砂礫層の下底部は，浅いトラフ型斜交葉理をなす比較的細粒の砂および礫質砂で，一部は流路の埋め残しを充填する．中・上部へは上方粗粒化し，極粗粒の中礫までの礫を含む．層理はほとんどみられず，おおむね塊状をなす．ただし部分的に砂ないしは泥質砂の葉理が2mまでの長さでとぎれて挟まれる．最上部はやや細粒である．このような層相から泥質砂礫層は，堆積物流（土石流）によるものと考えられる．その運搬様式は数回の布状洪水（Allen, 1985）で，前節で述べたように，沖積扇状地中位面以下の広い領域に堆積したと考えられる．この堆積物の分布範囲は，河川沿いの氾濫堆積様式とは異なり，前節に述べた扇状地斜面中位面の中・下部の多くの領域を覆っているとともに，調査地の位置する低位面のロウブの発達にも寄与している．

本層のもっとも粗粒な層準より上の，とくに中世以後の累重は，上方細粒化することから，調査地周辺では河川堆積作用が減衰していったと考えられる．扇状地斜面の耕作地の造成・維持や河川管理による氾濫様式の変化ともとれる．第2次調査地では，奈良-平安時代の堆積層の層厚は薄く，上述の堆積物流堆積範囲の縁辺に位置し，耕作地や建物敷地として断続的に利用された．また，中世以後は，3調査地の周辺は耕作地として最近まで維持された．

2.9 まとめ

東大阪市南東部，生駒山地西麓の楽音寺遺跡北東部で第2次発掘調査を行った．おもに現地の観察にもとづく岩相層序，不撹乱試料の研磨ブロックと薄片の観察にもとづく土壌層序，生層序に相当する遺構・遺物帯の分帯，周辺調査地との層相対比と地形発達の解析から，堆積物調査の結果，遺跡マトリクスは，それまでの扇状地間低地に，弥生時代後期以後に発達した扇状地ロウブ

で，これを構成する地表下約2.5m以上の，流路と氾濫原の堆積物の累重中に，弥生時代後期から近世・近代までの５つの遺構・遺物帯が含まれることがわかった．弥生時代には，扇状地間低地の流路沿いに発達した自然堤防に近傍の集落から土器が運ばれ，遺棄された状況がうかがえる．古墳時代前期にかけて氾濫堆積物が急速に堆積し離水した地表面では，顕著な植生発達と土壌形成の後，布留式期にそれらを一掃して土地改変が始まった．その後，断続的に畑地が造成された．古代前半には一時，建物敷地として利用された．水田が造成されるのは中世ないし近世以後と考えられる．また，確証を必要とするが，土壌の構造から古墳時代中期には牧場が拡がった可能性がある．

文献

池崎智詞（1999）池島遺跡出土高杯について．藤城泰氏追悼文集刊行会「海が好きだ」．pp.56－59.

才原金弘（2001）馬場川（第11次）・西代遺跡の調査．東大阪市教育委員会「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 ― 平成12年度」．pp.8－14.

下村晴文・菅原章太（1987）「西の口遺跡第１次発掘調査概要 ― 市立縄手中学分教場建設工事に伴う第１次調査」．財団法人 東大阪市文化財協会，94p.

永田朋子（2000）楽音寺遺跡の調査．東大阪市教育委員会「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 ― 平成11年度」．pp.47－49.

松田順一郎・別所秀高（1997）大阪府北島遺跡における畑地形成と地形発達．「日本文化財科学会第14回大会 研究発表要旨集」，pp.70－71.

三輪若葉（1996）池島遺跡第13次調査報告．「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 ―1994年度」．財団法人 東大阪市文化財協会，pp.5－8.

Allen, J.R.L.（1985）Principles of Physical Sedimentology. Allen and Unwin, pp. 159－180.

Bullock, P. 他（1989）「土壌薄片記載ハンドブック」（平山良治 他訳，久馬一剛・八木久義 訳監修）．博友社，176p.

Courty, M-A.（2001）Microfacies analysis assisting archaeological stratigraphy. Goldberg, P., Holliday, V.T., and Ferring C.R.(eds.) *Earth Sciences and Archaeology*. Kluwer/Plenum, pp.205－237.

Courty, M-A., Goldberg, P., and Macphail, R.（1989）*Soils and micromorphology in Archaeology*. Cambridge University Press. pp.126－137.

FitzPatrick, E.A.（1993）*Soil Microscopy and Micromorphology*. Wiley, 304p.

Retallack, G.J.（2001）*Soils of the Past: An Introduction to Paleopedology* (2nd ed.). Blackwell Science, pp.13－36.

Stein, J.K.（1987）Deposits for archaeologyists. In Schiffer, M.B.（ed.）*Advances in Archaeological Method and Theory*. AcademicPress, pp.337－395.

報告書抄録

	がくおんじいせきだいいちにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書
副書名	
編著者名	五井若葉，松田順一郎
発行機関	財団法人 東大阪市文化財協会
所在地	〒577－0843　東大阪市荒川3丁目28－21
電話番号	06－6736－0346
法人ID	42170
発行年月日	2001年12月31日
	がくおんじいせき
所収遺跡名	楽音寺遺跡
市町村コード	27227
遺跡番号	110

調査次数	第1次	第2次
調査担当者	五井若葉	松田順一郎
本文中表題	第1章　楽音寺遺跡第1次発掘調査報告	第2章　楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序
調査位置	北緯　34°38′45.7″ 東経　135°36′10.9″（JGD2000）	北緯　34°38′47.2″ 東経　135°36′18.3″（JGD2000）
調査期間	1995年1月10日～3月2日	1995年1月17日～2月3日
調査面積	296m²	123m²
調査原因	共同住宅建設	共同住宅建設
種別	集落跡，耕作地跡	集落，耕作地跡
主な時代	弥生時代中期～古墳時代弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式土器），同土器をともなう溝，弥生時代後期土器，古墳時代前期（布留式）土器，同土器をともなう溝状の落ち込み，掘立柱建物跡，ピット，土壙	弥生時代後期～古代弥生時代後期，古墳時代前期（庄内・布留式），古墳時代後期（～7世紀），奈良-平安時代，中世の土器片．奈良-平時代の掘立柱建物跡，溝状耕痕跡，近世・近代の耕作地の溝，導水管など．
調査概要		
特記事項		調査地の遺構･遺物帯，堆積層序と土壌形成，堆積物不撹乱試料の微細堆積相・形態分析，調査地周辺の沖積扇状地ロウブの発達．

楽音寺遺跡第1．2次発掘調査報告書
2001年12月31日
発行　財団法人 東大阪市文化財協会
〒577－0843 東大阪市荒川3丁目28－21
電話　06－6736－0346
印刷　株式会社 ミラテック
〒534－0025 大阪市都島区片町2丁目9－9
電話　06－6354－3081

The Reports of the 1st and 2nd Excavations of Gakuonji Site, Osaka Prefecture, Japan

Contents

Chapter 1 A report of the 1st excavation of Gakuonji site 1

1.1 Introduction 1

1.2 Results 2

Strata 1, 2, (2) — early modern to present time 2

Strata 3, 4 — in and after Kofun period 2

Starta 5, 5' — Late Yayaoi to Early Kofun period 5

Strata 6, 6' — Middle to Late Yayoi period 6

Stratum 7 — Middle Yayoi period 6

1.3 Conclusions 6

1.4 Reconstruction of a production technique of the *Kinai-fifth-style* boiling pot 14

1.4.1 Modeling traces on the bottom surface related to the production process 16

1.4.2 Paddling thechnique and its imprint 17

1.4.3 Conclusions and further consideration 18

Chapter 2 Ethnozones and pedosedimentological stratigraphy in and after Late Yayoi period in the northeastern part of Gakuonji site: a report of the 2nd excavation 19

2.1 Introduction 19

2.2 Gakuonji site 19

2.3 Location and procedure of the excavation 20

2.4 Lithostratigraphy and the characteristics of the strata 20

2.5 Ethnozones(EZs) 27

EZ1 (medieval to present time) 27

EZ2 (ancient to medieval time) 27

EZ3 (Late Kofun period to the early part of ancienttime) 28

EZ4 (Early Kofun period) 30

EZ5 (Late Yayoi period) 30

Relative dates of two buried channel fills 31

2.6 Observation of undisturbed soil samles 32

Method of sample preparation and observation 32

Results 32

Conclusions of the observation 39

2.7 Geomorphological setting of the site 42

2.8 Depositional succession and the landform evolution in the northern part of Gakuonji site 42

2.9 Conclusions 42

2001 Higashi-osaka City Cultural Heritage Associtation

楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書